

閃乱カグラでハーレム!?

遥彼方

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主がモテモテの状態で苦勞をするお話です

★のマークがある場所はエロシーンということですよ

## 目次

朝は大体こんな感じ	1
パンツを見せること、それは…	5
着替えの時に恥じらいを持ちましょう	9
口移しは案外食べにくい	13
★宇宙刑事が言いました「愛はためらわないことさ」ってね	18
困ったときは、半蔵にお任せ	27
少年、決意する	36
★舞い乱れます!?	42
雪泉編	
★舞い乱れます!?	54
大道寺編	
★舞い乱れます!?	67
雅緋編	
特別講師1人目：恋する姫たちの王	76
★舞い乱れます!?	80
美野里編	
★舞い乱れます!?	94
飛鳥編	
★舞い乱れます!?	106
焰編	
★舞い乱れます!?	120
両奈編	

朝は大体こんな感じ

「うおおおおー!!」

俺は今必死に走ってる。何故かって？

「待てー！ー!!」

飛鳥と焰の両方に追いかけてられるからだ

「何で、追いかけてくんだよー!!」

そう叫ぶと

「何で、未来ちゃんと美野里ちゃんと一緒に布団で寝てたの!!」

「そうだ、何でだ!!」

飛鳥の追求に焰も同意してる

「誤解だー!!朝、起きたら二人がいたんだよー!!」

本当だ昨夜はいつもどおり一人で寝てたのに二人が潜り込んだんだ

「なら何で、二人とも裸だったんだー!!」

焰が叫ぶ

「本当に何も知らないんだー!!」

そう返しても

「なら、何で逃げるの!!」

飛鳥が言う

「お前らその物騒な得物をしまえー!!」

二人は刀を出して追いかけてくる。そりゃ逃げるだろ

「追いついた!!」

両肩を掴まれ捕まる

「覚悟ー!!」

「ぎゃあああー!!」

俺の叫びが響く

学校の保健室

「もう、焰ちゃんも飛鳥ちゃんも何をしてるのよ」

「ご、ごめんなさい」

春花さんが俺の治療しながら二人に注意する

「まあ、わたしも同じ状況になったら同じことしちゃうかも」

うつとり、妄想しながら言わないでください

「はあく早く教室に行きましょう」

ため息を吐きながら教室に向かう

「そうだね」

と飛鳥が言って三人ともついてくる

## 教室

「おはよう」

あいさつしながら教室に入ると

「ハハハ、空ちゃん、朝から災難だったね」

四季が笑いながら携帯を俺に向けて、写真を撮っている

「うるせえ、それと写真を勝手に撮るな」

そう注意すると

「ごめん、ごめん。体で払うからさ」

そう言いながらスカートめくる。黒いセクシーなパンツか。じやなくて

「だー!!女の子がそんなことをするんじゃないやありません」

四季のスカートを押さええると

「ハハハ、空ちゃん、カワイイ」

笑ってやがる。ちくしょう

「お前は女なんだからもつと恥じらいを持ってよ」

そう言うと

「ええー、あたしがこんなことするの空ちゃんだけだよ。どう、嬉しい？」

にやにやしながら聞いてくる。この野郎

「嬉しいよ四季。四季みたいなカワイイ女の子にそこまで言ってもら

えるなんて」

頬をなでながら耳元で囁くように言うと

「なっ!!」

真っ赤になった。ざまあ見ろ

「四季、どうしたんだ？顔が赤いぞ」

形勢逆転だな

「そ、そんなことないよ」

慌ててる。カワイイやつめ

「何をなさってるんですか？」

急に絶対零度の声が聞こえてきた

ゆっくり振り返ると

「空さん、あなたは学び舎で何をしてるんですか？」

斑鳩さんが無表情、いや少し怒った表情でいた

「あ、あの、これは、その」

どうしよう、何か言い訳しなきゃ

「言い訳無用!!飛燕!!」

刀を抜き構える。死ぬ!!

「斑鳩ちゃん、もしかして嫉妬？」

四季が言うと

「そ、そんなことありません」

めっちゃ、顔を赤くして慌てていると

「お前ら、席に着け」

霧夜先生が教室に来た

「……斑鳩、何をしている」

「い、いえ、これは」

霧夜先生の質問に慌ててる斑鳩さん

「はあー、どうせ空が原因だろう。空、後でフォローしておけ」

「分かりました」

先生に言われたらしよがない。後で謝っておこう

「では、今日の連絡事項を伝える」

先生が今日の連絡事項を話し始めた

はあく疲れる

パンツを見せること、それは…

霧夜先生の連絡事項も終わり、授業の準備をしていると

「空さん、大丈夫ですか？」

隣の席の雪泉さんが声をかけてきた

「はい、大丈夫ですよ。いつものことなので」

そう答える

「四季さんがご迷惑を」

そう言って頭を下げてくる

「雪泉さん、頭を上げてください。俺は気にしてませんから」

そう言う

「そうだぜ雪泉、むしろ男なんだから嬉しいだろ」

後ろ席の葛城さんが言う

「そうでもないんですけど」

と言う

「じゃあ何だ、四季のパンツ見れて嬉しくないのか」

「いや、そりゃ嬉しいですけど」

だってカワイイし、エロいし、嬉しくないと言えば嘘になる

「だろ、だったらいいじゃねえか」

そうなんですけどね、何か納得いかないな

「なるほど、空さんは四季さんの下着が見れて嬉しいと」

雪泉さんが何か怒ってる。何故？

「なあ、雪泉」

「何ですか？」

葛城さんが雪泉さんと呼んで小声で話している

「だから…見せて…」

「なっ、そんなはしたないこと」

「でも…空が…ぜ」

「で、でも…」

何か俺の名前が出るみたいだ

「あの…お二人とも何を…」



そう声をかけると

「空さん!!いきます!!」

雪泉さんが何故か決意を固めた表情で

「どうぞ、ご覧ください!!」

スカートをめくつてきた

「ぶふうううー!!」

思わず吹いてしまった

「空!!アタイのも見ろ!!」

そう言つて葛城さんもスカートをめくる

「どうだ!!」

ど、どうだって、そりゃ

「あ、ありがとうございます」

素直に頭を下げた

今日は忘れられないだろう。黒、白、水色のストライプのパンツたちを

「お前たち何をしている」

凜先生がやってきた

「い、いや、違うんですよ、こ、これは、そのー」

「目が泳いでいるぞ空」

凜先生に指摘され

「は、はい、すみません」

謝ると

「空、後で職員室に來い」

そう言われた

「な、何故でしょう?」

聞き返すと

「私の下着を見せてやる」

とんでもないことを真顔で告げる

勘弁してくれ

「では、これで授業を終了する」  
授業が終わったく疲れたく

「空、来い」  
凜先生に呼ばれる

「あのー行かなきやダメですか」

「何だ、私の下着は見るに堪えんのか？」

真顔で言わないで下さい

「いや、そりゃ、凜先生はお綺麗ですし、見たくないと言えは嘘になります」

うん正直な気持ちだ。見たくないわけがない

「そうか」

そう言いながら俺の机に座り

「これでいいか」

M字開脚をしてきた

「ぶうううううううー!!」

そりゃ吹くだろ。目の前でM字開脚は

「げほ、げほ、先生何を」

ああ、まだしてるよ。四季よりエロい、ちよつと透けてる黒い下着が見える

「？お前が見たいと言ったのではないか」

そりゃそうですけど

「どうだ、目に焼き付けたか？」

首を縦に振る。しばらく、てか絶対に忘れられない

「よし、もし溜まつたら私のところ来い。私が相手をしてやろう」

何をとは聞かない、聞いたたら大変なことになる

「では、私もお前からもらおう」

そう言つて

「んううっ？」

キスされた。唇に

「んっ…んちゅ…あ…んむっ…」

しかもデープって、先生の舌と唾液が入ってくる

「せ、先生!!な、何をしてるんですか!!」

斑鳩さんが叫ぶ

「何って、男女の愛の確認行為だ」

凜先生はそう言って

「ではな、次の授業の準備をしておけよ」

教室を出て行く

残された、俺たち教室の雰囲気怖い

『……………』

皆が俺を睨みつけている

「あ、あの、み、皆さん武器をしまってください」

そう言うが

『問答無用!!』

全員が襲いかかってくる

「嫌……………!!」

何か朝もあつたなこんなこと

着替えの時に恥じらいを持ちましょう

みんなにボコボコにされ、机に突っ伏したまま授業が進んでいた

「あく次は体育だ。空いい加減起きろ」

霧夜先生に言われた

「えっ！もう四限の授業なんですか！」

「そうだ、遅れるなよ」

そう言っ出て行く先生

マズイ！かなりマズイ！主に俺の理性が

「じゃあ、着替ええないとな」

葛城さんがそう言っていきなり服を脱ぎだす。ぶるんとそのたわわな胸が揺れる

「お、俺は先に行きますね」

そう言っ出て出ようとすると

「何や、空は着替えんの？」

日影さんに呼び止められた。下着姿で

た、頼むから、隠してくれよ

「そうね、日影の言うとおりだわ」

両備の声が後ろから聞こえる

「じゃあ、両奈ちゃんをご主人様を着替えさせてあげる」

両奈がそう言いながら抱きついてくる

ふによんっつて、効果音になるぐらいの大きな胸が当たる

「や、やめてくれ、マジで理性が持たないから」

そう言うと

「なら、わしも抱きつくわ」

「両備も抱きついてあげる」

日影さんも両備も参戦ですか!!

「斑鳩さん、ヘルプー!!」

斑鳩さんを見ると

「わ、わたくしも抱きつくべきなんでしょうか、そんなはしたないマネをしても、でも私は学級委員ですし」

ぶつぶつ言っていた。くそー、こんな時に使えねえー

「貴様ら、その辺にしておけ」

「そうだよ、雅緋の言うとおりでだよ」

メシアだ、救世主だ

「次は私と忌夢だぞ」

「早く交代してよ」

地獄に叩き落とされた気分だ

「なら、次はオレと雲雀だな」

「うん、待つてるから早くしてね」

柳生ちゃん、雲雀ちゃん止めてくれよ

「じゃあ、私も」

「わ、私も空に、だ、抱きついていいと思うんです」

「わたしも空さんに抱きつきたいです」

「みのりもー!!」

その後も次々に私も私もと声をかけてくるが

「とりあえず、お前ら服を着ろー!!」

みんな下着姿だった

グラウンド

「お前たち遅いぞ」

大道寺先輩が腕組みをして仁王立ちしていた

「すいません」

そう頭を下げるしかない

「残り時間が十五分しかないでわないか」

結局みんな抱きついて来たから、五十分の授業が四分の一も残ってない

「今日は何があった」

「全員に抱きつかれました」

素直に報告する

「そうか」

納得して欲しくないのに、納得した感じの先輩

「なら、我も」

そう言っただけ思いつき抱きしめられる。顔が胸の谷間にパイルダーオンって感じだ

「やはり、お前は抱き心地がいい」

そう言われた。やべえー、先輩いい匂いがするし柔らかけー。じゃ、ない!!

「と、とりあえず授業しましょうよ」

そう言っただけ離れる

「いや、本当は五分使っただけ空争奪戦をしようと思っただけだ」

「それ昨日もやりませんでしたか？」

ちなみに勝者はいつのまにか参加した凜先生だ

「だが、全員がやる気を出すのはこれだけだ」

それは女子だけですよね

「あくあ、なら早く来ればよかった」

飛鳥そうじゃないよ

「空と二人で昼を食べたかった」

夜桜、もっと突っ込むべきことがあるでしょ

「わ、我も残念です」

叢さん違うよ

「じゃあ、今日の昼はどうするのよ」

未来ちゃんそうじゃない

「あつ、ならみんな食べるのは？」

美野里、何てことを言うんだ

「それはいいですね。今日のもやし料理は自信作なんです」

詠、この間のもやし定食はマジ勘弁してくれ、本当にもやししかないのは

「じゃあ、行くか!!」

焰、嬉しそうに先導するな

「俺の争奪戦で、何なんだよー!!」

本当、毎回勘弁してください

口移しは案外食べにくい

お昼休み 食堂

「あ〜ん」

はあく食べづらい

何で女子全員からあ〜んされてるんだらう

「空さん、美味しくないですか？」

紫ちゃんが目の前で不安そうな顔をする

「ち、違うよ、すつごく美味しいよ」

「そ、そうですか、良かったです」

俺の言葉に紫ちゃんが安心したような顔をする

「じゃあ、次はわたくしです」

詠が前に出てくる

「この間のもやし定食は勘弁してくれよ」

そう釘をさす

「美味しくありませんでしたか？」

詠が首を傾げる

「いや、確かに美味しかった。けどな、もやしにもやしのソースって何だよー」

もやしの味というか何とというかとりあえず、もやししか感じなかった

「そうですか空さんにも、もやしの素晴らしさを理解して欲しかったですが」

詠が悲しそうに言う

「いや、せめて味付けしてくれよ」

そう言う

「分かりました」

そう言ってもやしを口に入れて

「もぐ…もぐ…」

ん？何か嫌な予感

「ん…」



俺の顔を両手で固定しキスをする

「んー！んー！」

もやしが流れ込んでくる

「ちゅるっ…ちゅうう、んふっふあ…」

舌を入れてくるな

「ご馳走様です♡」

詠が満足そうな顔をする

ヤバイ！殺される！どうにかして言い訳を考えなければ！と周りをみると

「そっかーそんな良い食べ方があったんだね」

飛鳥が何故か嬉しそうな顔をする。他の面々も何故か頷いている

「あ、あのく皆さん、何を考えているのでしよう？」

聞きたくない、けど聞いておかないと後々大変なことになりそうだ

「よし、次はオレだな」

柳生ちゃんが目の前に座り

「…はむ」

ポ○キーを口に啜える

「……もしかして」

王様ゲームの定番！ポツ○ーゲームか！てか、何で○ツキーを持ってんだよ！

「雲雀のためだ」

オレの心を見透かしたように言う

「早く反対側から食べる」

どうする？どうする、オレ！もしこの場で柳生ちゃんのポ○キーを食べなければ物理的に死ぬ。けど食べたなら食べたで次の展開は分かっている

ちらつと周りを見ると

「じゃあ、次はわしじゃ」

「夜桜ちゃんの次はあたしー！」

「四季の次はわたしね」

「未来の次はアタイだな！」

「葛姐の次は私！」

「飛鳥の次は我だな」

「大道寺の次は私だ」

ポ○キーの箱から一本取りながら順番を決めていた  
てか、凜先生いつの間

「ふふ、良い事思いついた」

そう言って春花さんがどこかに行く

あの人が率先して何か始めるとろくなことがない。春花さんが何かする前に終わらせなければ大変なことになる。間違いない！

「分かったよ」

そう言って柳生ちゃんの反対側からポ○キーを啜えると

「…ん」

目にも留まらぬ速さで柳生ちゃんの顔が迫って来た。速！

「んっ…あ、んっ…」

唇の感触を味わう感じのキスだが

「…んちゅっ…ちゅっ、んっ…ぷは」

舌を入れて絡める

「美味しかった」

顔を赤らめながら恥ずかしそうに言う。カワイイ、場所が場所なら押し倒してもおかしくない可愛さだ!!

「じゃあ、わしじゃな」

今度は夜桜が座り

「…ん」

ポ○キーを啜えこちらに向けてくる

ええい、ままよ

「…んっ…んん!!」

俺からキスをしたことに驚いているみたいだ。だが、春花さんの計画が完成する前に全員終わりにする！

「んあ…あ…んむ…んちゅ…ちゅ…はあ」

夜桜が何か嬉しそうだ

「わ、わしは今夜は眠れそうにないんじや♡」

そう言って赤くなった頬を両手で押さえながら嬉しそうに席を立つ

「あたしの番だね」

四季が次は座る

「ん」

四季なら自分からやってくるだろう。そう思っただけで啜ると

「……」

「……」

動かない

「どうした、四季？」

「なんで夜桜ちゃんには空ちゃんからキスしてあたしにはしてくれないの」

不満そうに言う

「はあ、この後も全部俺からキスするの」

「分かった、啜えてくれ」

「そう言っただけで互いに啜え」

「んっ……あ……ん」

俺からキスをする

「れるっ……あふっ……んっ……んちゅ……あふっ」

舌を入れ互いの舌を絡めながら唾液を味わう

「空ちゃん、激しい♡」

「そう言っただけで四季は嬉しそうに席を立つ」

「その後も春花さん以外の全員とポ○キーゲームをした。ちなみに全員2周した」

教室

教室に戻り午後の授業が始まり

「空、春花はどうした？」

霧夜先生が俺に聞いてくる

「いえ、昼食の時間にどこかに行っちゃいました」

そう答えると

「まあいい」

納得し

「授業を始める」

そう言った

春花さんどうしたんだろう？

春花の自室

「ふふ、遂にできたわ」

春花は目の前の小粒の葉のような物を見ている

「楽しみね、空くん」

妖艶な笑みを浮かべながらそうつぶやく

★宇宙刑事が言いました “愛はためらわれないことさ”  
“ってね”

空の自室 前

「ふうく明日は休みか」

今日は金曜であるため明日と明後日は休みだ

「それにしても春花さんどうしたんだろう?」

そう言いながら自分の部屋に入ると

「待ってたわよ、空くん」

春花さんが私服姿で座っていた

「春花さん、どうしたんですか? 午後の授業も出ないで…」

春花さんと向き合うように机を挟みながら座る

「ちよつと良いことを思いついたのよ」

「良いことですか?」

「ええ、良いことよ」

春花さんが俺の言葉を固定する

「何ですか? 良いことって」

「それはね……これ」

俺の質問に何か小粒の薬みたいなものを机に置く

「何ですか、これ?」

「それは疲労回復、ビタミン剤って言えばいいかしら、そんな感じの薬よ」

俺の質問にそう答える。疲労回復ねえー

「でも、何でこれを?」

「空くんが普段わたしたちに振り回されて疲れているから、これで少しは元気になってね」

感動的なことを言ってくれる。やっぱり春花さん良い人だ

「ありがとうございますー!」

「気にしないで」

お礼を言って薬を手取る

「さつそく、飲ませてもらいますね」

そう言って台所に行って水を用意する

「今、開発中だからちよつとしかないのよ。ごめんね」

春花さんが申しわけなさそうに言う

「いえいえ、ありがたいですよ。薬のお礼にご飯をご馳走させてください」

「ええ、ありがとう」

春花さんにそう言って薬を飲む

「じゃあ、準備するんで待っててください」

「分かったわ」

そう言って俺は料理を作り始める

「「ごちそうさまでした」」

春花さんもご飯を食べ終わったので互いに言う

「じゃあ、食器は私が洗うわね」

「えっ、いいですよ」

「ご飯のお礼よ」

春花さんがそう言って俺の食器も台所に持って行ってしまおう  
「すみません」

そう言って春花さんに任せる

「ハア、ハア…な、何か…変だ…」

体が熱い、どうしたんだろう

「空くん、どうかした？」

洗い物をしてる春花さんがこちらを向きながら聞いてくる

「…ハア、ハア…あ、あれ？」

春花さんの身体が気になる。大きなおっぱいとか魅惑的な足とか。目が離せない

「大丈夫？」

そう言っつて近づいてくる春花さんからいい匂いがした。ヤバイ、襲いたくなる

「ハア…ハア…春花さん」

「あら、これはどうしたの？」

そう言っつて春花さんが俺の股間に触れる

「こんなに大きくしちやっつて」

そう言いながら俺に顔を近づけて来て

「我慢できないなら、襲ってくれていいのよ。だって、わたし、あなたのことを愛しているのよ」

そう妖艶な顔で言ってくる。我慢できない

「春花さん…」

「ふふ、春花っつて呼んでね」

春花さんがそう言っつてもっと顔を近づけてくる。唇を突き出せばキスできるくらいに

「…春花」

そう呼んでキスをする

春花をベッドの上に連れて行き、上から覆いかぶさり

「んふっ…んんっ…ぢゆる、はむ……はあぁっん」

互いに舌を絡めながら唾液の交換をする

「んっんうう…ぢゆる…、はう…んんっ…あん♡」

春花の口の中に舌を入れ掻き回しながら大きなおっぱいを揉む

「春花っておっぱい大きいね」

「大きいのは嫌い？」

俺の言葉に春花が聞いてくる

「ううん、むしろ好き」

そう言つて春花のセーターを脱がすとブラに押さえられながらも大きなおっぱいが露になる

「…春花」

そう言つておっぱいに顔を埋めると

「いいのよ、あなたの手で脱がして」

と春花が言ってくる

春花のブラの真ん中に手をかけそのままブラを下にずらす

ぶるん!!

おっぱいが全て露になり乳首も出てくる

「…春花……乳首が立ってる」

「言わないで♡」

恥ずかしそうにしながら

「好きにして♡」

そう言われて乳首を親指と人差し指で挟み込む

「んんっ、いきなりさきっぱは…あふ、つまんじゃ……ああん♡」

乳首を捻るように摘む

「何だ、気持ちいいのか？」

「はうっ、んっ、そ、そうなの、ひやふっ、あなたに乳首を好きにされて気持ちいいの♡感じちゃうの♡」

嬉しそうに言う

「じゃあ、こっちは…」

左手で乳首をいじりながら右手を春花の股のほうに近づける

「あっ、はああっ…あ…スカートが…んんっ邪魔…ね」



そう言つてタイトスカートを脱ぐ

「このエロい下着は何だ？Tバックじゃねえか」

「こうな、んっ！、る、んあっ！、こと、き、ふあ、たい、あああ…っ  
！」

春花の説明している最中に下着の中に手を入れま●こを指でいじると春花がビクツ！と小さく跳ねる

「いったか？」

「はあ、はあ…だつて、気持ちイイいんだもん♡」

嬉しそうに言う

「春花、ばっかりズルイな。俺のもしてくれよ」

そう言つてジツパーをおろして肉棒を取り出し春花の乳首に押し付ける

「ああん♡、…これがあなたのペ●ス…：太くて大きい♡」

春花がうっとりしながら言う

「春花…ち●ぽって呼んで」

俺が言う

「うん…あなたのち●ぽ…素敵♡」

春花が言う

「あ♡また、大きくなった♡」

「春花、パイズリして」

そう言つて春花の顔、目の前に肉棒を突き出す

「…はい♡」

嬉しそうに言つて両手を使つておっぱいで肉棒挟む

「うあっ」

おっぱいの肌触りと柔らかさが気持ちよくてつい声が出る

「気持ちイイ？」

「ああ、気持ちいいよ、春花」

「じゃあ、このまま動かすわね」

そう言つておっぱいを上下に動かし肉棒と擦り合わせてくる

俺も合わせて腰を前後に振る

「んっ…春花あ、舐めて」

「いやあん、命令して♡」

そう言いながらもおっぱいの動きは止めない

「くっ…はあ、春花、舐めろ」

「はい♡」

命令すると嬉しそうに返事をして

「…れちゅ…ちゅる……れるっ…」

舌を出して舐めてくれる

「んくおっ、はあっ…春花も気持ち良くしてやる」

そう言つて乳首をクリクリと摘む

「あふっ…んっ、ああっ…んっ、だ、ダメ…」

春花を感じながら言う

「はあ、はあ、何がダメなんだ?」

「わ、わた、ああん、し、あっ♡、イ、んんっ、ちや、んあっ…うから」

「なら、春花も頑張つてよ」

そう言つて肉棒を春花の啜えられる位置にもっていく

「じゅちゅっ!んっ、んちゅっ!んんっ!」

「あっ…やべえ…うっ」

春花が肉棒を啜え舌を竿に絡めながら吸い付いてくる

「んっ…春花…口の中に出すぞ」

「んっ…れる、出して、わたしの口にあなたの精子ちようだい…れ

ちゅっ…」

そう言つてまた口に啜える

「ん…ちゅう、ちゅううう…んろお…」

「んくっ!!」

春花の口の中に大量に精液を吐き出す

「んぶ、んう、あ、じゅる、れろっ……じゅる!」

春花の口から精液が漏れるが一生懸命に飲もうとしてくれる

「んっ、んくっ…こく……んはっ、はっ、はあっ…」

「春花」

「あなたたがわたしで射精してくれたのが嬉しいの」

妖艶な笑みで嬉しそうにつぶやく

そんな顔で言われたら止まれない

「……春花」

下のほうに移動して、春花のTバックを脱がせ足を開かせる

「…お願い、わたしの初めて奪って」

そう言って俺のほうに両手を伸ばしてくる

「……」

俺は黙って手を繋いで近づき、肉棒ををま●この割れ目に近づけ

「挿れるぞ」

「……」

俺の言葉に春花が頷く

ゆっくり肉棒を膣なかの中に入れていく

「う……」

「はあっ、んっ…んんっ」

ズズツ…ズズズツと奥へとゆっくり入れると少し抵抗がある。処

女膜か

「行くぞ」

「うん…来て」

少し力を入れて膜を突き破る

ブツリ

とも聞こえる音を立て、少し膣から血が垂れる

「はっ、あはっ…はあん…あああ!!」

春花が軽く跳ねる

「痛いかな?」

と聞くと

「はあ、違うの、気持ちよくてイっちゃった♡」

嬉しそうに言う

「本当に大丈夫かな?」

そう聞くと

「…ん」

軽く唇に触れるキス

「大丈夫、あなたの好きに動いて、わたしをあなたの女にして」

—ッ!!

もう我慢できねえ!!

腰を前後に激しく振ると春花が

「あつあああ〜!?!ああ〜!!なにこれ、言葉にならないいい」  
嬉しそうに叫ぶ

「春花!春花!」

「ああ、膣なかがあなたのち●ぽで、はあっ…はああ!満たされるッ!

「もつと、奥まで俺の女にするぞ!!」

「うん!来て—!あなたのち●ぽで激しく突いて!」

腰大きく振りさつきぽで子宮の入り口を叩く

「ごつつ、ごつつて子宮の入り口い叩かれてる♡」

春花が嬌声を上げる

俺の腰の動きに合わせて春花の大きいおっぱいが揺れる

「はあっ…くっ…い…」

今にも射精そうなのを我慢して両手で乱暴におっぱいを揉む

「ひっ!ひいインッ!おっぱい、揉んじやダメ!イクう…!イツちやう—♡」

膣が肉棒を締め付けてスゴイ快感が襲ってくる!!

「春花あ!射精ぞ!お前の膣なかに!!」

「お願い、射精して!わたしの膣なかに射精して!あなたをわたしに刻み込んで—!!」

春花が叫ぶ

「はあっ、はあっ、イクうっ…!」

「イクうっ♡わたしもイクうっ♡」

もう我慢の限界だ

「春花あっ!!」

名前を叫びながら膣なかの奥、子宮に精子を吐き出す

「イクうつ♡イクうつ♡ううー♡♡」

春花も背中を反ってガクガクと震えながら

「あああー♡」

声をあげる

射精が終わり少し息を整える

「ハア、ハア、ハア」

「ああ♡子宮うつ…精液、いっぱい♡」

春花が嬉しそうにお腹の下を撫でる

「春花！春花！！」

「んんっ…ちゅむ…！、んっ…んんっ…っ！」

唇を重ね舌を春花の口にねじ込み絡め、互いの首に手を回す

「ハア、ハア」

「はあっ、はっ」

互いに唇を離すと糸が引く

「これでわたしはあなたの女♡」

春花が愛おしそうに唇をなぞる

その姿がエロくて、また俺の女にしたくなる

「あ♡」

で肉棒が大きくなったことを感じて喜ぶ春花

「春花、今夜は寝かせないぞ」

「ああん♡もつと、わたしに、あなたの女ってことを実感させて♡」

甘えるように言う春花に黙って口付けをし、そのまま朝まで互いを

求め合う

困ったときは、半蔵にお任せ

空の自室

「う、うくん」

自分のベッドで目を覚まし上半身を起こす

「…あれ？昨日どうしたんだっけ？」

確か春花さんにご飯を食べてそれから…

「うくん…」

「え…」

隣から声が聞こえたのでそちらを見ると

「あら？空くん、起きたの？」

春花さんが裸でいた

「え、え、な、何で？」

ワケがわからない

「もう、昨日から今日の朝まで激しかったんだから♡」

「き、昨日？」

春花さんの言葉に昨日のこと、というか今日の朝までのことを思い出した

「あ、ああああー!!」

思わず叫ぶ。やっちゃまったー！そうだ思い出した！昨日、何でか身体が熱くなって春花さんの身体から目が離せなくなって自分が抑えられなくなつて、それから…

「で、でもどうして…」

俺が疑問をつぶやくと

「実は昨日の薬は媚薬とかを混ぜたものよ。主に催淫剤をね」  
そう春花さんが説明する

「な、何でそんなこと」

俺が言うと

「あなたを愛しているからよ」

春花さんが真剣な表情で俺を見る

「あなたも分かっているんでしょ？わたしも含め全員があなたに好意を持ってゐることを…」

「それは…」

春花さんの言葉に思わず言葉が詰まる

みんなが俺に好意を持つてくれていることは分かっている。でも、一人を選ぶと後々大変なことになりそうだから、できるだけ意識しないようにしていた

「誰か一人を選んだら、他のみんなが可哀想？」

春花さんの言葉に頷く

「ふふ、それなら大丈夫よ」

「…えっ？」

春花さんの言葉に思わず聞き返すと

「空さん、どうかさされましたか？」

第三者が部屋に入ってきた

「あんなに大きな声を……」

斑鳩さんが部屋に入ってきた俺たちを見て固まる

「あら、斑鳩ちゃんダメよ、今は二人きりの時間なんだから」

春花さんはそう言つて、俺の首に手を回しそのままベッドに引きずり込む

「な、何してるんですかああああー!!!」

斑鳩さんの叫びが響いた

寮1F リビング

「……………」

「……………」

俺は今みんなの前で正座し汗を流している

「美味しいわねこれ」

春花さんはのん気にプリンを食べていた

「……春花から何があったか聞いたぞ」

凜先生がみんなを代表して言う

「はい、春花さんといたしました」

素直に申告する。逃げ道なんてないさ

「いやくん、空くん、は・る・か・つて呼んで♡」

春花さんが俺の背中に抱きつきながら言う

「男らしくて激しかったんだから、特に『俺の女にするぞ!!』って言われた時嬉しかったわ♡」

『……………』

春花さんがうっとりしながら言うときみんなの視線が厳しくなる

「…は、春花さん、お願いですから黙っててください」

「なら、春花って呼んで命令して♡」

俺の言葉に春花が耳元で甘えた声で言う

「春花、黙ってる」

「はい♡」

『……………』

俺たちのやり取りにさらに視線が厳しくなる

「…な」

「な？」

飛鳥が何か言おうとしているので首を傾げながら聞くと

「何で私じゃないのー！ー！！」

飛鳥が叫ぶ

「……………は？」

思わず口を開けて思わず言う

「じゃあ、次は私ね。今すぐ空くんか私の部屋でエッチしよ♪」

飛鳥が嬉しそうに俺の手をつかんで引っ張ると

「おい！飛鳥！次は私だろ！」

焰が言う



「いや、次はアタイだ！」

「次はわしや！」

「次はボクだよ！」

「次は両奈だよ。ご主人様に調教してもらってご主人様専用のペット（性奴隷）にしてもらうのー！」

「わ、我もつ、次がいいです。く、空さんと、え、エッチします！」

「小娘共、次は私の番に決まっているだろう」

「凜さんでも譲れないぞ」

「わたくしも空さんと」

「次は、あ、あたしよ。ちよ、ちようど、ネ、ネットでやりかたを知ってるんだから」

「……わたしも…空さんと…」

「わしも女つちゆうこと教えて欲しいわ」

「次はオレだ」

「次はひばりだよ。柳生ちゃんでもこれは譲れないよ」

「次は私だ。私が女であることを空に教えてもらう」

「次は両備に決まってるじゃない。あんたらバカじゃないの」

「次は私ですよ。空さんの体で暖めてもらいます」

「次はみのりだよ！」

「次はあたしだよ。ブログに写真載せちやおう、彼氏と初エッチって」

「つ、次は、がっ、学級委員長である、わ、わたくしです！」

みんなが俺に訴えてくる

「え、ちよ、ちよつと待って…」

俺が止め

「こ、この状況はなに？」

『？』

俺の言葉にみんなが首を傾げる

「春花さんから聞いてないの？」

「な、何を？」

飛鳥が代表して聞いてくる

「私たちみんな空くんのお嫁さんになるって話し」

「……………はっ?」

飛鳥の言葉に口を今まで以上に開く。しかも「なりたい」じゃない、  
「なる」確定なのかよ

「みんな空くんのが大好きだからどうしようかって話しあってたら、  
じっちゃんに来て『男ならたくさんさんの美少女と結婚したいと思う  
もんじゃ!』って」

校長、あんた何言ってるんだ

「だから、みんなで結婚して仲良くしようってことになったの」

「いや、日本じゃ重婚はできない…」

飛鳥の言葉に反論すると

「その点はモウマンタイじゃあー!!」

校長が叫びながら現れた

「じっちゃん!」

飛鳥が反応する

「うむ。説明しよう……………霧夜がな」

「いや、あんたが説明しろよ」

校長のセリフに思わずツッコむ

「では、私が…」

「霧夜先生…いつ入って来たんですか?」

いつの間にか霧夜先生が入り口に立っていた

「説明ッ!!」

霧夜先生が叫ぶ

「第三話の『着替えの時に恥じらいを持ちましょう』の『読む前の注意  
点。其の三』でも説明したが」

「メタ発言やめてください」

霧夜先生の発言にツッコミを入れる

「学校の敷地内は治外法権だからな、半蔵様が許可すれば重婚は可能  
だ」

そう説明する

「その通りじゃ！」

校長が同意し

「わしもひ孫の顔が見たいのでのう」

笑いながら言い

「もう、じつちやんたら／＼／＼」

「ガーハハハハハッ!!」

飛鳥が照れ、校長は笑っていた

「ひ孫が見たいって…あんたまさか…」

「うん？当然許可させてもらったぞ」

「あんたはバカかああああー!!」

俺の質問に何を当たり前のように言う

「何でじゃ？今、少子高齢化社会じゃし子供はたくさんいるほうがいいじゃろ？それに全員納得しとるのでな」

「学校で重婚が認められていても卒業したら学校を出るようだろうが！」

校長が首を傾げるので俺が言うと

「安心せい、手は打ってあるのでな」

自信満々に言い

「わしの弟子に結構有力な国会議員がおってな、孫のために重婚が認められる法案を通してくれと頼んだら二つ返事でしてくれたわい」

そう説明する

「だ、だからって、たった一人が案を出したって…」

「何を言つとるんじゃ？」

俺の言葉に校長が首を傾げ

「誰が一人だけと言ったんじゃ」

「え？」

校長の言葉に思わず聞き返すと

「今いる、国会議員は全員わしの弟子じゃぞ」

「はああああー!!」

校長の言葉に思わず叫ぶ

「あ、あんた何者だよ!!」

俺が聞くと

「半蔵じゃ」

「そうじゃねえよ!」

俺がツツコむ

「しかしの〜一つ問題があつてのう」

校長が顎に手をあてながら言う

「いや、他にもいっぱいあるだろう」

俺が言う

「第一夫人は誰にするんじや?」

俺に聞いてくる

「……………え?」

『……………』

思わず聞く。みんなは俺を見る

「何を言っておる。結婚するなら第一夫人くらい決めておかんいかん

ぞ」

校長が言う

『もちろん私（わたし・わたくし・アタイ・オレ・ひばり・我・あたし・

みのり・ボク・両備・両奈ちゃん・わし・うち）だよ（だろ）!!!』

みんなが俺に言う

「え、ちよ、ちよつと、みんな、ま、待って…」

俺が言う

「まあ、誰にするかはお主に任せる。必要があればわしと霧夜も協力

を惜しまぬぞ」

「ああ、空。俺と半蔵様が協力しよう」

校長と霧夜先生がそう答え

「当面の問題はなんじや?」

「とりあえず、空が春花以外の全員を抱くことですね」

二人で勝手に相談していた

「なるほど、それは見落としていたのう。まあ、男なら何とかするじや

ろ」

「はい、それは空に任せましょう、彼自身の問題ですし。我々はイベン

トの企画と準備、後は結婚式の段取りとかですかね」

「なるほどのう。では、行くか」

「分かりました」

そうやって出て行く二人

「…そうだ。空」

「…何ですか？」

霧夜先生が何か言ってきたので

「コスプレ衣装やその他もろもろの性行為に必要な物や欲しい物は学校に申請してくれば経費で落ちるのでな安心してくれ。もし、欲しい物や必要な物があつたら私の携帯にメールをしておいてくれ。この寮に届くようにしておこう」

何を真面目な顔で言っただあんだ

「これは空だけではない。お前たちも空を誘惑するために欲しい物があつたら私にメールしてくれ」

『はい』

みんなが返事する

「それと、しばらく私は授業ができないのでな。たまに特別講師が来ることになるかもしれん」

「いや、仕事しろよ」

俺がツッコむが

「でわのう、皆の衆。飛鳥、次に会うときはひ孫の顔を見せてくれ」

「うん！じっちゃん、任せて！」

校長の言葉に飛鳥が返事をする

「半蔵様、行きましよう」

「うむ」

今度こそ二人は寮を出て行く

「半蔵様、子どもの面倒を補佐する者も手配しましょうか？」

「そうじゃのう。いきなりは難しいかもしれんから、子育てアドバイザーでも呼ぼうかのう、もちろん飛鳥たちのために女性を」

「分かりました」

そんな会話して二人は見えなくなる

『……………』

全員が睨みあっている  
とりあえず、どうしよう

## 少年、決意する

「……はあー。どうすればいいんだろう…」

俺は一人、学校の屋上にあるベンチに座りため息をつく

「みんなの気持ちは嬉しいけどさ…」

そうつぶやいて空を見上げる

「たくさんの女の子に手を出すって人としてどうなのさ…」

そうだよな…いくらみんなが良いと言ってもくれてもさ、何か決心がつかないんだよな…

「はあー、校長と先生も乗り気だし、どうすればいいのかな  
何か周りが固められてる気がする

♪♪♪♪

ポケットに入ってる携帯が鳴る

「ん？誰だ」

携帯を取り出しディスプレイを見ると

「父さんか…」

そう言っつて携帯を耳にあてる

「もしもー」

『おおー、息子よー!!元気かー?私は母さんとラブラブデート中だぞー!!』

電話に出るといきなり耳元で大声が響く

『ん?息子よ、どうした!!事件か?』

「うるせえよ!!耳元で叫ぶなって何回言えばわかんだよ!!」

父さんの疑問にそう返す

『それはすまんかった』

「はあー、別にいいよ。で、何か用?」

そう聞くと

『さつき、半蔵様から電話があつてな、何だお前、嫁さんたくさん貰うんだつてな、それも全員が美人なそうじゃないか』

嬉しそうに答える

「父さんにも、話しがいったのか」

『おう。良かったじゃないか。何だ少しうらやましいぞ…』

父さんが言う

「それは、周りから見ればね…でもさ、当事者つて結構大変なんだよ…」

『……………』

「父さん？」

おかしい父さんの声が聞こえない

『あら、空ちゃん元気？』

電話の相手が代わった

「母さん？父さんはどうしたの？」

『私の足元で地面とキスしてるわ』

母さんが言う

「さいですか…」

ちよつと不機嫌になったな

「はあ、それで？母さんは何の用？」

『ふふ、お父さんと同じよ？』

嬉しそうに答える

「はあー、それで悩んでるんだよ…」

『あら、何で？』

俺の言葉に母さんが聞いてくる

「いやさ、みんなに好きって言われて嬉しいけどさ…：…：…周りを何人も女の子で囲む男ってどうよ？」

『まあ、最低ね』

俺の言葉に母さんが返してくる

「ぐっ。でも、母さんの意見が正しいと思うよ」

俺がそう言う

『それはどうかしら？』



母さんがそう返してくる

『確かに私は嫌だけど、その子たちはみんな構わないって言ってくれてるんでしょ?』

『そうなんだけどさ……なんて言うかさ、昔からさ恋愛って一対一でやるものだと思ってきてたからさ、ちよつと戸惑ってさ』

母さんの言葉にそう返す

『でも、それは今までの常識でしょ。今の空ちゃんはそれが通用しなからこそ、柔軟な考えが必要なんじゃないかな?』

母さんが優しく言う

『でも……』

俺が何か言おうとすると

『ふふ、これは私の考えだから気にしないで、ただ、私が言いたいことは空ちゃんが自分にとって後悔しない選択を選んでねってことよ。難しいかもしれないけどね』

母さんが言う

『少し考えてみるよ』

今はそう答えるのが精一杯だ

『そう。じゃあ、空ちゃん最後に言わせて』

母さんが俺の答えにそう聞いてくる

『何?』

『空ちゃん、女の子はね好きな人の傍に居たいものよ。それと自分の気持ちに嘘をついちゃダメよ』

そうか…

『ありがとう。母さん』

『どういたしまして』

そう言って電話をきる

『俺の後悔しない選択か…』

そう言って空を見上げ

『俺の気持ちは…』

目を閉じながらそうつぶやく

寮1F リビング

「決心がついた?」

「ああ」

飛鳥がみんなを代表して俺に聞く

「考えたんだよ」

「…?」

俺の言葉にみんなが首を傾げる

「俺さ、みんなのことが好きなんだよ」

「……」

俺の言葉にみんなが真剣な目を向ける

「だからさ決めたんだ。最初は周りから何言われるか分からないけど、みんなと結婚するって…」

「!!」

俺の言葉にみんなが反応する

「こんな俺だけどき…みんな、一緒にいてくれるかな?」

俺が言う

『もちろん!!』

みんなが笑顔で答えてくれる

「これからよろしくね」

『末永くよろしくね!!』

俺が言うとみんなが言う

「じゃあ、次は誰が空くとエツチする?」

「うくん、そこは空に選んでもらったほうがいいんじゃないか?」

「そっか。うん、空くんを選んでもらおう」

「でも、とりあえず私たちの初めてを貰っていただかないといけませんね」

「そうだな、全員一回りするようにしよう」

「それとわしら年上も呼び捨てでいいんちゃう？」

「そうだな。むしろ呼び捨てにして欲しいくらいだぜ」

「そうですね」

俺を除いてみんながワイワイ騒ぎ出す

「あははは」

俺は苦笑いすることしかできない

「……そういえば、空さんは誰を第一夫人にするんですか？」

『……………』

「えっ!？」

斑鳩さんが突然言う

「そうだな、それは忘れていた」

「重要なことだね」

「わ、我も、き、聞きたかったです」

みんながうんうんと頷く

「どうなんだ？」

雅緋さんがみんなを代表して聞いてくる

「あ、あの……そこはですね、……まだ考えてないんですよ」

『……………』

俺の言葉にみんなが黙ってこちらを見てくる。正直、怖い

「まあ、そこら辺はおいおい決めてくれればいいんじゃない？」

『そうだね（ですね・だな）』

忌夢さんの言葉にみんなが頷く

「あはは、ちゃんと決めますよ」

俺が言うと

『うん！待ってる（よ・ぞ・わ）!!』

笑顔で答えられた。はは、本当にどうしよう

その日の夜

「とりあえず、みんなに言うべきことは言ったかな？」

そう言いながら寮の中を歩く

「後は、俺がみんなにできることをやるしかないな……」

そう言っつて部屋の前に立つ

「ふうー、覚悟を決めろ、俺」

そう言いながら部屋をノックする

『はい』

部屋の主が返事をしたのを確認して、扉を開けて部屋の中に入る

★舞い乱れます!? 雪泉編

雪泉の部屋

「…お待ちしておりました」

「こんばんわ、雪泉さん」

部屋にはいると雪泉さんが着物姿で出迎えてくれた

「むっ!」

「あ、えつと……雪泉」

「はい」

すごい勢いで睨まれたので呼び捨てで呼ぶと嬉しそうに頷く

「どうぞ……中にお入りください」

「ええ、お邪魔します」

雪泉が部屋の中に入って行くのでついて行く

「ここです」

「……雪泉」

「何でしょう?」

「これって、あれ、いわゆる夫婦で旅館に泊まるところなるやつですよ  
ね」

思わず雪泉に聞く

だってさ布団が一つしか敷いてない上に枕が二つって……漫画の  
世界だけの話しだと思ってた

「はい、その通りです」

自信満々に言うことじゃないよ

「空さん、お風呂は?」

「部屋に来る前に入ってきました」

うん、だってどういうことをするか覚悟を決めてきたから

「……そうですか」

雪泉が残念そうにする

「では、私も身を清めて参ります。こちらでお待ちください」  
「……はい」

雪泉は歩いて風呂に向かう

「無理に気丈に振舞わなくてもいいのに……」

顔を赤く染めて緊張したように歩く雪泉を見てそうつぶやく

「もしかして、一緒に風呂に入るつもりだったのかな？」

ちよつと残念かも……

「……………」

互いに布団の上で正座して向かい合う

「その…不束者ですがよろしくお願いします」

「あ、はい。こちらこそ……」

雪泉のあいさつに思わず返す

「……………」

互いに動かない

いざと思うと緊張する、雪泉も下を向いて恥ずかしそうにしてるし

ふうー、男は度胸だ！そうだろう、俺！

覚悟を決める

「…雪泉」

「…あ…」

雪泉に近づき顎に手を置き顔を上げさせ

「…ん、ちゅ…んうう…んっ」

唇が触れるだけのキスをする

「はあ…んっ…」

「んう…ちゅ、んう…ん…ふあ、…ん…」

ヤバイ、キスが気持ち良い上に、一生懸命答えてくれる雪泉がカワイイ

「雪泉、好きだよ」

一回唇を離し耳元で囁くように言う

「……はい、私もです」

少し照れながら雪泉も答えてくれる

「もう一度……」

「ああ……」

今度は雪泉から

「ちゅ……んっ、ん……ちゅ……んう……」

さつきと同じように唇が触れるだけのキス

「……んうう……?!ふ、んう……ちゅぱ、んっ……」

雪泉の唇に舌を押しつけると雪泉が軽く驚くが口を開き舌を差し出してくる

「んっ、んっ、んう……ちゅ、んう……んう……んううう……」

互いに舌を絡ませる

「ん、んむ、ちゅ、ぺちや……んむう……ちゅ……ん、はあ……」

舌を絡ませながら唾液も絡ませる

「んっ……ちゅ、んう……、はあ、はあ……」

一度唇を離す

「ご、ごめん。雪泉が可愛くてつい……」

雪泉にそう声をかける

「良いんで……す」

「……無理にしなくても良いんだよっ……」

まだ、少し震えている雪泉に声をかける

「嬉しいんです。好きな人に求められるのは……ですから、お願いします……」

雪泉がそう言つて帯をはずして着物を脱ぎ、綺麗な白い肌や、大きいおっぱいが露になる。下は白い下着を穿いてた

ゴク

思わず生唾を飲む

やっぱり雪泉の肌って綺麗だよな

「雪泉、触るよ…」

「んっ…」

そう言っておっぱいに手を伸ばし触れる

「ひゃ……あん、んっ……変じゃない、ですか…？」

「全然変じゃない。むしろ最高だ」

柔らかすぎる感触にほど良い弾力で揉み応えのあるおっぱい、これを最高と言わず何と言う！

「そ、そうですか…？んっ…あん…あ、んう…」

少し撫で回しながら揉み

「んっ…ちゅ、んっ……ん、んう、ん…」

キスをする

「んっ、んっ……ちゅ、ん…んうう…ぺちや…んっ…」

舌も絡ませ唾液も絡ませる

「んちゅ……んっ、ちゅば、ん、んうう…ん、ふあ…」

一度、唇を離す

「…胸が、ピリってして…あんっ、先がむずむずします…」

感じてるのかな？

「雪泉、もつとするよ」

「んっ…はい、もつと…」

俺の言葉に雪泉が頷く

「じゃあ…」

指先で乳首をつまみんで、ゆっくりと弄る

「ふああっ、んうっ…あ、ん、あっ…！変な感じが、しますう…。あっ、ん、あっ」

感じてる。それじゃあ…

おっぱいに顔を近づける

「ひゃあんっ！ち、乳首イ、んっ、舐めたら、あっ、んうう…ああああっ！」



雪泉が内股を擦り合わせている

「雪泉、美味しいよ…」

「そ、そんな、あつ、とこ、んっ、ダ、ふあ、あつ…!」  
乳首が尖ったので舌で転がす

「んっ、んっ…あ、ふあ、やあん…んうう…!」

雪泉の喘ぎ声が頭に響く、乳首を舐めるのが止められん

「あんっ、そんな舐めたら、んうっ、だめえ…。んっ、あん、んあああつ  
!」

雪泉が声を上げ体を震わせる

「雪泉…、下も良いな?」

「はい…」

「布団の上で足を開いて…」

そう言ってもう一度キスをする

「こ、このような格好…」

パンツ一枚になった雪泉が布団の上で仰向けに寝て足を開いてい  
る

さすがに恥ずかしいのか、手で股間を隠している

「嫌なら無理にしなくてもいいんだぞ?」

「い、いえ…最後まで、お願いします…」

雪泉が涙目で言う

ヤバイ、涙目なのがスゲーそそる

「わかった。じゃあ…手を退けて…」

「あ、あまり見ないでくださいね…」

雪泉がゆつくり手を退け、下着が丸見えになる。しかも、良く見ると、中心部分にシミができてるみたいだ

「そ、そんなにマジマジと、み、見ないでください…」

「ごめん。でも、可愛いよ」

そう言いながらキスをする

「んっ…んうう…」

雪泉の緊張が少し緩んだかな

「触るよ…」

キスをしながら股間のほうに手を伸ばす

「ふあ、あ…っ、んう…：…んううう…っ」

割れ目を指先でなぞる

「あ…あん、く、くすぐったいです…んっっ…」

「あ、ああ」

こっちも経験少ないからどうすればいいのか…。もう少し感触を確かめるか…

俺は雪泉の股間をまさぐっていく

「ひゃ、んっ…：…ふあ、ああ…：…あん…っ。指が食い込んできて…んっ、んうう…っ!」

シミが広がって大きくなる

そこを指で突くと

「ひゃっ…：や、指が、ふあ、中に、あん…入って、んっ、だめっ、あ、んう…あっ…!」

いやらしい汁が溢れてくる

「…：…エロい」

思わずつぶやく

「好きな人に、んっ、弄られたら…、あっ、女の子はそうなります、あん、よ…」

俺の愛撫で感じてくれてるのか…

「雪泉…脱がすよ」

俺がそう言っつてパンツを掴む

「…：…はい」

雪泉の返事を聞いてびしょ濡れのパンツをずり下げ、秘部を露にする

「う、あ、あ…そ、そんなに見ないでください…っ」

雪泉が恥ずかしそうにする

愛液が溢れ出でている。糸が引いていてエロい

「綺麗だよ、雪泉…」

そう言っつて股間に口をつけ舐める

「んああああっ…：…んっ、き、あっ、汚い、んうううっ…、で、あ

あああつ…！」

大きく腰がくねった

ここを舐めるといいんだな

俺はそう思って重点的に責める

「ひゃ、んっ、んうううっ…はあっ、はあっ、ん、ああっ…んううっ！」

ぴちやぴちや音を立てながら舐めるとさらに愛液が溢れ出す

「私…もお…んううっ…！あっ、あ、あ…っ」

気持ちよかったのか、どこか惚けた表情を浮かべていた

「はあ、はあ…雪泉、そろそろ良いかな…？」

俺はそう言ってズボンを脱ぎ、パンパンに張った肉棒を取り出す

「それが、殿方の…」

雪泉が初めて見たみたいで少し驚いている

「…雪泉」

肉棒を雪泉の割れ目に当てる

「はい。…私を、愛してください」

雪泉が頷く

「挿れるぞ…」

ゆっくりと雪泉の膣に入れていく

「んっ…う、あ…熱い…」

ある程度進めて止める

「わ、私は大丈夫ですので、一気に…」

懇願するような顔で言う

「…わかった。行くぞ」

腰に力を込め、一気に突き出す

「んううっ…う、あ、ぐっ…んあああああつ…!!」

処女膜を裂いた感触がして、雪泉が大きく背中を反らしながら、苦

悶の声を上げる

「はあっ、はあっ、んうう…いい、痛みが…う、ああっ…！」

「ぐっ…締め付けが、スゴイ…っ」

膣内が収縮し、肉棒を思いつ切り締め付けてくる

結合部分から血が流れていた

「雪泉、大丈夫か？」

「はあ、はあ、だ、大丈夫です。痛いのは、最初だけと聞いていましたから…んううつ」

俺の言葉にそう答える

「それに、嬉しい気持ちの方が、大きいですから…つ」

雪泉が少し苦しそうに答える

「……雪泉」

そんな雪泉を見て、少しでも痛みを和らげるためにキスをする

「ん……ちゅ、んちゅ…れる、んう…んん…」

唇にキスをして、ゆっくりと互いの舌を絡ませる

「んむうう…ん、ちゅる…んん、んうう…はあつ、はあつ…」

少しの間キスをして唇を離す

「…動くぞ」

「はあ、はあ、はい、私をあなたの女に…」

雪泉の体を押さえ、ゆっくり腰を前後に振る

「んううつ、んつ……ふあつ、あつ、んあああつ…!!あつ、中で、擦れ……て、んつ、んうううつ、あ、あ、あつ…!」

「くっ…スゲー気持ち良い…っ!」

肉棒が温かく締めつけられて気持ち良すぎる

「私の、中……んあつ、あつ、あぐ……気持ち、良いですか…?」

「ああ、最高だ…」

そう言いながら腰を打ち付けるように動かす

「んつ、あつ、んぐううつ、ふあ、奥、に、んつ、届いて…あつ、あああつ…!」

突けば突くほど膣内で肉棒が締め付けられ快感が込み上げ、腰の動きが止められない

「雪泉……はあ、はあ、雪泉…っ」

「んあああつ!ひやつ、変な、んああつ、感じが、んん…っ」

快感が込み上げてきて、射精感が膨らんでいく

「うあ、あ、中で……大きく…っ、んうううつ…!ふあ、あ、あつ…!」  
膣で肉棒が大きくなったことを感じて雪泉が声を上げる

「…もう、イキそう…」

「んうううっ、ふあ、あっ、伊って…私の、あっ、中で、気持ち良くな…っ」

雪泉が足で俺の腰をホールドする

「ひやつ、ふあ、んうううっ…！あっ、あ、あぐっ、あっ…！！」

何度も強く腰を振り、膣の奥まで届くように打ち付ける

「あっ、奥、んううっ！で、ふあ、伊って…っ！」

雪泉の膣が収縮しとてつもない快感が襲ってくる

「くっ……で、出る…っ！」

「んううっ、ふあ、あっ…あ、あ…っ！」

雪泉がホールドいた足の力を強める

「くっ、う、うあああ…！！」

雪泉の奥に精液を流し込む

「ん……う、あ…んああああ…！！」

雪泉も腰が少し浮く

「はあ、はあ…」

俺が息を整える

「はあ、はあ……中に、いっぱい…」

雪泉が妖艶な顔で言う

「雪泉……もう一回」

「えっ!?あ、あの……あっ！」

雪泉の膣内でもう一度、肉棒が硬くなる

「……行くぞ」

「す、少し、待っ、あんっ！」

腰を前後に動かす

「ごめん。我慢できない…」

「ん、そ…んんっ、なら、あっ、しょうが、ふあ、ない…んっ、ですね…んんっ!!」

俺が正直に告げると雪泉が微笑んでくれる

「あっ、あっ…んんっ…っ！」

腰を打ちつけると雪泉が声を上げる

「あ、あつ、んひいつ、ふあ、あああああーっ！」

少し角度をずらして突くと雪泉が一番の声を上げる

「くっ…今の締め付けはやばかった…」

膣内で締め上げられ一気に快感が襲ってきた

「んひいつ、あ…あつ、んっ…んううう…っ!!」

さっきの快感を何度も味わうために腰を打ち付ける

「んっ、はああつ、そ、そこは…んんっ、ダ、ダメ…あん…っ！な、何か、来る…っ！」

肉棒が、ぎゅつと締め付けられる

「あつ、ああああ…っ！んんっ…んううう…っ！んああああああーっっ！」

雪泉の体が跳ねた瞬間、快感が襲ってきて

「で、出るっ！」

また雪泉の奥で精液を流し込む

「んううう…っ！あつ…んん…っ」

声を上げる

「わ、悪い、初めてなのに…」

俺が声をかける

「はあ、はあ、お気になさらないでください。私も嬉しいですから…」

雪泉が嬉しそうに言う。…エロい

「……………ごめん」

「はい？…あつ、また中で…」

俺が言うのと雪泉が意味がわからないので首を傾げる

「行くぞ」

「す、少しだけ、きゅっ、休憩を…ああああーっ！」

俺はまた雪泉を求める

「はあー、ゆみちゃん、いいなあー」

「そうだねー、あたしも早く抱いて欲しいなあー」

「そうだな、我もそう思う」

「わしもそう思います」

雪泉以外の死塾月閃女学院のメンバーが雪泉の部屋の前の廊下で  
小声で話している

「あたしはいつでも良いように勉強しとこ」

四季がそう言つて

「おやすみー」

部屋に戻る

「わしらも戻ろうか…」

夜桜がそう言つと

「そうだな」

「うん！」

叢と美野里が返事をして

「おやすみなさい」

「おやすみ」

「おやすみー」

それぞれが部屋に戻る

「ごめんな…」

俺が隣で寝てる雪泉に言う

「いいえ、私は今すごい幸せです…」

雪泉が笑顔で返してくれる

「ああ、俺も幸せだよ」

そう言つて

「…ん…」

唇に触れるだけのキスをする

「おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

俺たちは眠りにつく



★舞い乱れます!? 大道寺編

— 体育館 —

「大道寺先輩、大丈夫ですか?」

隣で倒れている先輩に声をかける

「問題ない」

大の字に寝ている先輩が天井を見ながら答える

何故こんなことになってるかって言うと、先輩の部屋に向かっている途中で当の先輩と鉢合わせして、そのまま体育館に連行され一戦交えることになり結果こうなった。俺は何を言ってるんだろう

「……やはり空は強いな」

「大道寺先輩も十分強いですよ」

だって、体育館の天井が吹き飛んでるだけ。強くないってほうがおかしいだろ

「いや、我もまだまだ修行が足りん」

この人どこまで強くなる気なんだろう

「空、これからも模擬戦を頼むぞ」

「はい。俺の修行にもなりますから……」

先輩の言葉にそう返す

「うむ。では行こう」

先輩が起き上がって俺の腕を引っ張っていく

「え、どこにですか?」

「私の部屋だ。そのつもりで来たのだろう」

先輩が言う

「そうですけど。まさかこれから?」

「当然だ」

一戦交えてスゴイ疲れてるんですけど……

「えーと、そのー」

俺が戸惑うと

「我とは嫌なのか?」

先輩が不安そうな顔をする

「そ、そんなわけないじゃないですか！」

「そうか。では行こう」

「……はい」

成す術もなく先輩の部屋に向かう

— 大道寺の部屋 —

「空、先に汗を流すがいい」

「先輩が先にどうぞ俺は後で大丈夫ですから……」

どうも風呂の準備はしていたみたいだ。用意周到なこと……

「い、いや、我にもその準備というものが……」

いつもハキハキとしている先輩が珍しく言葉に詰まる。やっぱり緊張してるのかな？

「わかりました。では、先に入らせてもらいますね」

俺はそう言って脱衣場に向かう

「ああ」

先輩が返事をする

「ふー、温かいな」

浴槽に浸かりながらそう言葉を漏らす

「あ、着替えましょう……」

持ってきかないよな。困ったな、全裸で寮をうろつくわけにもいかな  
いし

「どうしよう、先輩に持ってきてもらうって言うのよなー」  
俺がそう考えていると

「空、入るぞ」

「…え？」

先輩が全裸で入ってきた

「え、せ、せ、せ、先輩!」

思わぬことにビックリする

「う、うむ。その…斑鳩から借りた雑誌に書いてあったのだ。夫の背中を流すのは妻の役目とな…」

少し赤くなりながら先輩が答える

「い、いや言いたいことはわかりましたけど…」

俺が戸惑う。だって、まだ覚悟できてないし

「あ、あまり見るな!」

先輩が大事な部分を手で隠す

「す、すいません!」

マジマジと先輩の体を眺めていたら注意されてしまった

「わ、我も恥ずかしいのだ。こんな初めてなのでな」

「そ、そうですか」

先輩の言葉にそう返す

「イスに座つてくれるか」

「は、はい、わかりました」

先輩に言われイスに座る

「で、では、し、失礼する」

そう言いながら先輩が俺の後ろに座ると

ふによん

といった感じの音の音が聞こえるような感触が背中に伝わる

「えっ……あつ、先輩……?」

「こ、こつちを見るな!そ、それと先輩と呼ぶな」

「す、すいませんっ」

大道寺先…、大道寺の言葉に慌てて正面へ向きなおし、体を落ち着ける

背中に広がる柔らかい感触……間違いなくおっぱいである

こ、これは、あれか、スポンジの変わりにおっぱいで洗いますつて  
やつか!

「ぎ……雑誌に、こういう風に押し付けて洗うと良いと、書いてあったの  
だが……ど、どうだ?」

「さ、最高です!」

これは男なら誰しもが夢見るシユチュエーションだろ

「う、うむ……次はこれを……」

大道寺が洗面所の脇にあるボディークリームを手に取り泡を立てる

「んっ……こ、こんな感じで……良いか?」

泡が足されたことで、おっぱいがつうと滑り背中いっぱい快感  
をもたらしてくれる

「ど、どうだ……? 気持ち……いいか?」

「ええ。男に生まれて良かったと思っっています!」

泡が与える滑りが、まさかここまで気持ちよくするなんて、ボ  
ディークリームを作った人はノーベル賞ものだ

「んっ……それなら良い……もつと、気持ちよくしよう」

大道寺が言いながら体を上下に動かす

「は……んっ、んんっ、んんっ……ふ……んっ、んんんっ……」

背中を往復するだけかと思えば、大胆に体を動かし、腰や肩など至  
るところにおっぱいをくつつけてくる。そして、乳首が色んなところに当  
たりその存在感を増やしていく

「んんっ……あつ、ふっ……はあ……んっ、ああ……」

大道寺から吐息が増え、耳元に吹きかけられていく

「そ、それが……男の……」

「え、ええ、男ならしょうがないかと」

大道寺が勃起した俺の肉棒に気付く

「ま、任せろ……やり方は、雑誌に書いてあった……」

大道寺がおっぱいを押し付けたまま、おずおずと勃起した肉棒を握  
る

「あ……ああ……こ、こんなに熱く硬いのか……」

大道寺が少し驚き

「た、確か…最初はゆっくり…」

大道寺がゆっくりと肉棒を握った手を上下させ扱く

「く……うっ……大道寺…」

「ま、まだ硬くなるのか…ああ…」

大道寺も興奮しているのか吐息がさつきより漏れ、もじもじと体が落ち着きなく揺れる

「…ふ、太い……これが男の…」

肉棒を掴んで扱く細い指の感触がたまらない

「くう…や、やばい、気持ちよすぎる」

「そ、そうか…なら、ちよつと早く動かすぞ」

肉棒を少し強く握り、さつきよりペースを上げて扱く

「く……だ、大道寺…それ以上は…」

「で、出るのか……？このままするから……だ、出してかまわんで…」

大道寺が俺の反応に嬉しそうにしながらもとおっぱいをさらに押し付けてくる

「んっ…あつ、嬉しいぞ…私の好きな男のこと、気持ちよくさせて…

あ、んんっ……！」

大道寺が吐息を漏らす。さらにおっぱいが押し付けられたことで乳首のコリコリ感

次々と襲いかかってくる快感にもう我慢できない

「……うっ、出る……！」

体を少し痙攣させながら、肉棒から精液が溢れ出し先輩の手をねつとりと汚していく

「こ、これが…精液…」

大道寺は驚きながらも、手を休めず扱いて精液を搾り出そうとする  
「うっ!?」

「硬い…んっ、一回では…足りないか…んんっ…」

手の動きが激しくなっていく

「あつ、はっ、んっ、ふ、震えている……気持ちいいのか…」

大道寺がまだ硬い肉棒を握りさつきより激しく扱く、さつきの射精

間もない痺れが残ったまま、体が絶頂感へと上り詰めていく

「くうっ…だ、大道寺…ああ…続けられたら、うくっ、ま、また…！」

「で、出るのか…？いいぞ、出してくれ…！」

「あ…くうっ、で、出るっ！」

再び肉棒から精液が飛び散り、熱い粘液が大道寺の手にへばりつく  
「あ…また出て来るのに…硬い…んっ」

大道寺はまだ硬い肉棒を触って驚きが隠せないみたいだ

「はあ…はあ…はあ…」

「す、凄いな…こ、こんなに出るものなのだな…」

「え、ええ。まあ、大道寺のが…上手でしたから…」

「そ、そうか？な、なら良かった。一生懸命勉強した甲斐があつた」

照れくさそうに答えながら、大道寺は体を離そうとせず

「…そ、その、覚悟はできている…」

密着状態で、ぎゅっとおっぱいを押し付けたまま言う

「わかりました」

俺はそう言つて先輩と正面に向き合う

「ん…ちゅ…んん…こんな濡れてるなら大丈夫かな？」

キスをしながら大道寺の股間に触れる

「ん、く…あ…んっ」

大道寺も感じてるみたいだ

「…大道寺」

強く抱きしめながら湯船に浸かり胡坐を搔き、その上に先輩が乗る、いわゆる対面座位をして、大道寺の股間の割れ目に肉棒を擦り付ける

「あ…んんっ、ふあ、大丈夫だ…」

大道寺が俺の首の後ろに手を回す

「…行きます」

肉棒をゆっくり中に挿入させていく

「んうっ、ああっ、ふあ…」

大道寺が声を漏らし

「んうう、あつ、一気に来い…あつ…！」

俺の顔を見ながら言う

「…はい」

肉棒を一気に奥まで挿入する

「はあ…：うっ、ううっ…：はあつ、んっ！んんっ…！」

大道寺が少し顔を歪める

「大丈夫ですか…？」

俺が声をかけると

「んっ…：はあ…：んんっ、この、程度…：痛みにもならない、んんっ、安心、しろ…：はあ…：！」

大道寺が返す

「んんっ、むしろ、はあ、違和感が、んっ、大きいな…：ん…：！」

大道寺が少し腰をくねらせると膣なかがぎゅつと閉まり肉棒を包み込んで来て快感が襲ってくる

「んあっ…：動いて、んんっ、いいぞ…！」

大道寺が微笑む

「じゃあ、ゆっくり行きますね」

大道寺の腰を掴んでゆっくり上下させ、俺も腰を合わせて動かす

「はああ…：んんう、私の膣を、あふっ、熱い棒が、ああん、押しあげてくる、んんっ！」

大道寺がしがみつきながらゆっくりと腰を上下に動かす

「大道寺…：少し奥に行きますよ」

そう言つて少し腰を強く打ち付ける

「んっ…：あつ！んんっ、くう…：奥を突き上げ、あつ、ああ、られる感じが、ふあ…：ああっ！」

大道寺が一際大きな声をあげる

「…大丈夫ですか？」

「はああ…：んんう…：お、奥を突き上げられたら…：んんっ！め、目の前が、一瞬真っ白になって…：んんっ、はあ、あつ…：！」

奥を突くたびに大道寺の声が漏れる

「じゃあ、行きますよー！」

少し速めに奥を突き上げるように腰を強く振る

「んあつ、あ、ああつ…んんっ、んくっ…んああつ！」

パチャパチャと音を立てる水面に負けないくらい大道寺が声をあげる

「大道寺…」

目の前で激しく揺れるおっぱいを触らずにはいられない！

「んああつ、む、胸…んんっ、まで、んあつ…ああつ、んんっ」

急におっぱいを触られ大道寺の体がビクツと跳ねる

「ああ、柔らかい」

おっぱいを揉みながら感想を言う

「そ、あん、そうか？あん…なら、んっ、もつと、ふあ、触って、ああん…！」

大道寺が腰を上下させながら言う

「なら、失礼して」

おっぱいの谷間に顔をグリグリ押し付ける

「あんっ！あ、ああつ、子ども、んくっ…みたいだな、はああ…」

じゃあ、今度は…

「うん！今度は、乳首を、あああつ、舐め、んっ、赤子だった、か、あん…！」

乳首を甘噛みしながら腰を強く打ち付ける

「あ、ふあつ、あん、んくっ…ふああつ…、あつあ、あん…！」

膣がまたぎゅつと閉まって快感が襲ってくる

「お、奥う、あああつ！届いて、ああつ、んんっ！」

腰を強く押し付け奥を突く

「あんっ、あ、あふっ…ああつ…」

大道寺がだらしけなく開けている口を

「ん、うう…！」

キスで塞ぎ腰をさらに打ち付ける

「んああつ…あつ、あんっ…ちゅっ、ちゅぱっ、れろ…れる、ん、ふああつ！」

大道寺の背中が少し反る



「…気持ちいいよ」

「んっ、わ、我も、はあ、はあ、気持ちいいぞ、あんっ！」

大道寺が強く抱きついてきて、肉棒が膣なかを押し上げる

「もつと、もつと我に実感させてくれ…ああっ！我も女の、あんっ、一人である…ああっ…！」

大道寺の腰に手を回し、もつと強く抱きしめ唇を重ねる

「んあっ、んちゅっ…ちゅくっ、ちゅ、ちゅぱっ、ふああっ…んああっ  
！」

膣なかの奥、子宮を叩くと喘ぎ声が響く

「奥がいいんだね？」

そう言つて腰を打ち付ける

「ふああっ！あんっ！んあふっ、ああんっ！ああっ！ん、んんっ！」

声がさらに艶っぽくなる

「ふあっ、あっあ、あんっ、ああっ…あんっ、ああっ、ああっ…！」

膣が締め付けてくる

「大道寺の中、さつきから痛いほど締め付けてくるよ」

耳元で囁く

「あ、だつて、愛する…んああっ…男と、一つになれて、嬉しくて…ああんっ、離したくな、んくうっ…！」

可愛いこと言つてくれるじゃないか！

「大道寺…！」

「あつ、まだ大きく…ふああっ！あつあ、あんっ、ああっ！」

「手加減なんてできないぞ！」

「ひやううっ！んああっ、あつあ、あ、ああっ、んんっ！ああんっ、ん、ん、ん、んくっ…ふああっ、あ、あああっ！」

普段からは想像できない大道寺の姿を見たい！その一心で子宮を叩く

「お、奥まで、ああ、あくっ、ああ、あんっ！あつあ、んああっ！」

「ちゅっ…れるっ…大道寺、好きだよ…！」

「んちゅっ…ちゅぱっ、ちゅ、我も、好き…れる…！」

互いに貪るように唇を合わせる

「あふっ、ああっ、あんっ、あ、ああっ、ん、んんっ、んあっ、あんっ！」

キスをしながら激しく腰を動かし強く打ち付ける

「んくっ!?んはあっ!あむっ、んちゅっ、ちゅぷっ、んう…、ふあっ、ああんっ!」

腰の動きをどんどん加速させる

「んくっ、はああっ!んちゅっ、んんうっ!んふう…んんうっ!もうっ…んあっ、ああっ」

大道寺が腰を淫らにくねらせ

「あっ、あっ、あくっ、あ、ああっ、んああっ!」

少し体が跳ね、膣が締まる

「う…」

大道寺もそろそろ限界みたいだが、このままだと俺が先に出てしま  
いそうだ

「大道寺…!」

大道寺のお尻に手を添え、俺も激しく腰を動かし膣内を突き上げる  
「ひうつ!あっあっ、んんんっ、あーっ、くるう、なんか、ああっ、く  
るう、あああっ!」

大道寺の脚が俺の背中に回りしっかり固定してくる

「んっ、んちゅっ、ちゅっ、んはあ…中に、んんっ、出して、あっあ、  
くれ、あああっ!」

膣が今まで一番、肉棒を締め付けた瞬間

……出る!

「んはあっ、はああっ!熱いのが、中に、出てるうう!」

奥に射精すると、大道寺が体全体を震わせよがった

「はあ、はあ…ん、はああ…あ、ふ…はああ…」

快感の余韻で、大道寺の体がびくつびくつ震える

「あ、ああ…中が、満たされて…る」

大道寺が嬉しそうにつぶやく

「すごく気持ちよかった…」

「……私も気持ちよかったぞ」

俺の言葉に大道寺が返す

「……そのー、大変申しわけないんだが……」

「どうした？」

「もう一回いいかな？」

「?……! そういうことか。構わないぞ」

大道寺が俺の言いたいことが判ったのか承諾してくれる

「じゃあ、今度は壁に手をつけて腰をこっちに向けて」

「……こうか？」

俺のお願い通りに大道寺が壁に両手をつけお尻をこちらに突き出す

…ゴク

多分、無意識にやっているんだろうが、突き出したお尻を左右に振っている姿を見ると誘惑しているようにしか見えない。早い話が我慢できない!

「…挿れるぞ」

両手でお尻を掴み肉棒を挿入する

「んくっ!? ふあっ、あああああっ!」

大道寺が大きな嬌声を上げる

さっきの行為で膣に残っていた、大量の愛液と精液のおかげでスムーズに根元まで挿入できた

「…くっ!」

さっきの射精の快感がまだ残っているのですぐに出そうだ

両手をお尻から腰を掴むように掴み

「一気に行くぞ……」

「…ふえ?」

腕を引きながら腰を打ち付ける

「あああっ! んくっ、んうっ、あっ、いきなり奥う…はううっ! んあっ、あああっ!」

さらに速く、強く腰を打ち付ける

「はっ、はっ、あふっ、はああっ、あ、あんっ、あっ、ああっ、んっ、あっ、ひ…ひうっ、んああっ」

大道寺もさっきの絶頂の余韻がまだ残っているみたいだな

「んっ、あふっ、んあっ、あーっ、あっ、んふああっ、あーっ、あ、ああああっ」

艶のある声が浴室に響く

「んっ、んっ、いつ、いつ、中、擦つてえ、んんうっ！奥う…届いてえ、んああっ!?!あっんあっ、ああっ、ふああっ」

大道寺も限界そうだが俺も限界に近い

俺は掴む手に力を込め腰を振る速度をどんどん上げる

「も、もう、い…あっ、んんうっ、あああっ、あああ…うあー!」

大道寺の全身が大きく跳ね

「ふあああああっっっ!!」

背中を大きく反らし、一際、大きな声をあげる

「ううっ!?!」

ぎりぎりまで快感を貪っていた俺は、射精の瞬間、肉棒を奥に押しつける

「…出る!」

「んううううっ!?!あ、あああ…また、中に、熱いの…あ、あ、あ、出てるう…!」

膣の奥で射精すると大道寺が嬉しそうにする

「はあ、はあ、大道寺は気持ちよかった?」

「はあ、はあ、ああ夢中になるくらいな…!」

俺の言葉に顔だけこちらに向けながら答える

「まだ、足りないから風呂からあがったらいいかな?」

俺が聞く。このままじゃ夢中になつて互いにのぼせるからな  
「もちろんだ。何たって夫の世話をするのは妻の務めだからな」

大道寺が正面に向き直りキスをする

「それにしても何で一緒に入ろうって言わなかったの？」

隣で寝ている大道寺に聞く。もちろん一つの布団に二人でだ

「い、いや、その恥ずかしかったし、それに一緒に入ろうと言うと空が逃げそうだったんでな」

「全然、むしろ嬉しいし」

だって、今回みたいに体を洗ってもらうなんて貴重な経験もできるし

「そうか」

俺の言葉に大道寺が嬉しそうに言う

「大道寺は俺と一緒に居て幸せ？」

「当然だ。空は我が初めて負けた男だ、そんな空の傍に居られて幸せだろう」

俺の質問に微笑みながら答えてくれる

「そっか」

俺は大道寺の顔を見ながら答える

「空は我と居て幸せか？」

「当然だろ。こんな美人と一緒に居れて嬉しくないわけがないだろ」

俺が笑顔で返す

「ああ」

大道寺が俺の言葉を噛み締めるように言う

「明日も一応学校だから寝ようか」

「そうだな」

俺の言葉に大道寺が頷き

「お休み」

「ああ、お休み」

唇を合わせるだけのキスをして眠りにつく

★舞い乱れます!? 雅緋編

雅緋の部屋

今は雅緋の部屋でベットのの上に2人で座っているんだが……

「み、雅緋……」

「ひゃ、ひゃい！」

「そんなに緊張しなくて大丈夫だから……」

「す、すまん。初めてだからどうしても緊張してしまつて……」

俺に背中を向けてベットにぺたんと座り込んでいる雅緋

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ！わ、私も、か、覚悟はできている！」

どう見てもガチガチだな。ここは俺から行く

「雅緋……」

「あ……」

後ろから雅緋を抱きしめる

「ん……ふ……」

後ろを振り向いた雅緋と唇に触れるだけのキスをする

「雅緋……」

「ん……」

名前を呟きながら、目を閉じたまま緊張している雅緋にキスをする  
数回だけ交わすキスではなく、長いキスを……

雅緋の不安を少しでも取り除くために強く抱きしめながら

「ん……んんっ、はあっ……」

唇を離すと、少し顔を赤くしながら小さく頷いてくれる

「ああ、ありがとう」

雅緋は少し落ち着いたように言う

「もう大丈夫だ……だから頼む」

「……ああ」

俺は頷きながら雅緋の服を脱がしていく

「あ……」

下着姿になって少し恥ずかしそうにする

「雅緋、綺麗だよ……」

「そ、そうか。お前にそう言ってもらえると嬉しい」

俺の言葉に雅緋が少し笑顔を見せながら言う

「下着も外すよ……?」

「う、うん」

雅緋が素直に頷いたのを確認して、まずはブラジャーを剥ぎ取る

「あっ……」

瞳をギュツと閉じ少し恥ずかしそうに体を震わせる

ゴク

雅緋の仕草がいつものギャップでさらに可愛いし、やっぱりおっぱいも大きい

「……触るよ」

「う、うん」

背中から雅緋を抱きかかえるようにして、おっぱいに両手を伸ばす

「きゃっ!?!」

「少し、強かったか?」

「ち、違う……! な、何か……胸を触られただけで、身体に電気が走ったみたいで……」

少し驚いたように言う

いきなり触るのは失礼か……

俺はそう考えておっぱいに手を添える

「あっ……ふぁ……!」

両手に収まらない圧倒的な柔らかさが伝わってくる

や、柔らかい……! 暖かくて、ずっしりとして……すっげえ気持ち良い……!! ずっと触っていたい! なんて女性のおっぱいはこんなに素晴らしい……!!

らしいものなのか!?

「こ、このくらいか…?」

「あ、ああ…少し、くすぐりたいが、気持ち良い…かも…」

「そうか、痛かったら言ってくれ…」

指を折り曲げておっぱい全体に手を掛けると、指に柔らかい突起が触れる

乳首を摘んでも大丈夫かな…?

親指と人差し指を使って乳首を摘む

「ひゃつ!だ、ダメえつ…!」

雅緋が可愛らしく声を上げる

「雅緋、気持ち良い?」

耳元で囁きながら指で乳首をコリコリする

「はあぁっ…!こ、声が、んあっ…!出ちやう…んくっ!」

ほんの少し力を入れるだけで、雅緋が体をビクビク反応させる。少しずつとろける表情と。目の前の剥き出しでくねる背中

普段の凛々しい姿から想像できない艶っぽい声がたまらなくエロ

い!

「あぁっ、あうっ…!ん…はあっ…!」

「雅緋…?」

「んあ…あ…な、んっ、何…だ?」

「ベッドに横になってくれるか?」

「あ、ああ…わ、わかった」

「じゃあ、仰向けで足はこっちに向けて少し開いて…」

雅緋が俺に言われた通りにする

「ああ…恥ずかしいなあっ…」

さつきより顔を赤くして恥ずかしそうにする

「…こんなに濡れてる…」

乳首をいじっただけで、目の前の下着にくっつきりと染みが浮き出ていた

「よ、よくわからないんだ…。胸を触られてたら…頭がぼーっとして、な、何がなんだか…わからないんだ…」



雅緋が瞳を細めて、涙を潤ませながら色付いた吐息を漏らす

「雅緋の匂いがすごく濃くて…頭がクラクラして来るな…」

「わ、私の匂い…」

「うん。女の子の良い匂いだよ」

「そ、そうか」

雅緋が安堵したように言う

「当然だよ。雅緋は可愛い女の子なんだから…」

「あ、ああ。私も女なんだ、だから…好きな男に触られたり、見られたりしたら…。き、気持ち良くなるんだ…」

体を少し震わせながら雅緋が嬉しさを噛み締めるに言う

「はあっ…見てるだけじゃ、嫌だ。もつと、身体に触って欲しい…」

「もちろんだよ」

雅緋のお願いに頷きながら答え、パンツに手を掛けゆつくりと足から引き抜く

「……っ！」

雅緋がぎゅつと目をつぶる

片足にパンツを引っ掛けた雅緋の、股間の割れ目から、つうつと細かい透明な糸が伝わっている

エロい

「へ、変じゃない…?」

「変じゃないよ。むしろ綺麗だよ」

そう言いながら、舌を出して雅緋の股間に顔を埋める

「ああっ!? な、何だ今の…あんっ!!」

「雅緋の…ん…すごい、濃くて…んぐ…すごい興奮する」

「ああっ…そ、そんなとこ舐めながら、んああっ、言わないでくれえー!」

雅緋の股間越しに顔を見ると、未知の快感に戸惑いつつ感じているようだ

俺はそれを確認して、舌先で雅緋の愛液を掬って丹念に塗り広げる

「はあっ…そ、そんなに…っ! しらないで…お、おかしくなるう…」

「ん、ここ硬いな…この硬いところが、気持ち良いのか」

「ひゃうっ!? だ、ダメだ! そこはダ…んあああっ! やあっ、あああっ!!」

も、もうっ、何が何だかあ…ああっ!」

舌の動きを一瞬止め口を離すと、俺の唾液と雅緋の愛液が混ざって、さつき以上にとろとろになっていた

「雅緋…少し激しくするぞ」

「え…激しくって…、わ、私…もう…」

俺はすっかり硬くなったクリトリスに唇を付けて、舌を動かしながら吸い上げる

「んああっ!そ、そんな風にされたらっ…こ、声が、あああっ!」

「雅緋のイヤらしい声、もつと聞かせてくれ」

「ん、んんっ…そんな恥ずかしいことできるわけえ…はああっ!!」

さつきよりも甘い声で鳴きながら身体をくねらせる。俺は太ももを逃がさないようにがちりと両手で抱え込んで、思う存分に割れ目に口を付け唇と舌で嬲り上げる

「ふあっ!んんあっ…!ああっ、はああっ…!!はあっ、はあっ…はあっ…!も、もうダメえ…んああっ!」

俺が吸い付いたり舌を這わせる度に、体がビクビクさせて反応を返してくる

股間にむしゃぶり付く俺の頭を、ぎゅつとふとももで挟みながら、両手で俺の頭を撫でた

「わ、私…もう大丈夫だから…:お願いだから、来て欲しい…」

「ああ。俺も…:雅緋が欲しくて我慢できない」

「…そう言ってくれると嬉しい。なんだろう、恥ずかしいけどすごい嬉しい…」

緊張しながらも幸せそうな顔で微笑んでくれる

「雅緋…」

「ああ、来てくれ…私の初めて、もらってくれ…」

「ああ、出来るだけ優しくする」

「ありがとう…。ん…」

雅緋を抱き寄せキスをする

俺の肉棒を雅緋の割れ目に当て、ゆっくりと侵入させる

「ああっ…:…く…ううっ…!!」

雅緋が苦しげに声を漏らす

俺は動きを止め雅緋の髪をゆっくり撫でる

「雅緋、大丈夫か？」

「んんっ…あ、ああっ…だ、大丈夫だ…」

歯を食いしばりながら、少し殺した声で呟く

「雅緋、無理はしないでくれ

「ほ、本当に…大丈夫だ…そのまま、来てくれ…」

「俺はお前が大切なんだ…」

「んんっ…こ、これは仕方のないことだ…、それに…この痛みは、お前に愛されているんだ…だから、そんな顔をしないでくれ…」

結合部から破瓜の血が零れているが見えている

痛みに顔を歪めながらも、俺を励ましてくれる雅緋が健気で愛おしい

「雅緋…、お前を最後まで愛す」

「ああ…私が…女だって、お前の女であるってことを、身体に刻み込んでくれ…」

「…当然だ。嫌ってほど教えてやる…」

俺はゆっくりと肉棒を奥へと進ませる

「ううっ…くっ…んんううっ…！」

「もう、少しで…全部、入るぞ…」

「あ、あ…ちゃんと、全部…入れて…！私の中、いっぱいにしてくれ…！」

ぎゅ、ぎゅ、と締め付けてくる雅緋の膣の奥へと肉棒を侵入させる  
膣の奥に行けばいくほど、膣の感触が柔らかくなって行くのを感じながら、肉棒が奥に突き当たる

「…雅緋、全部、入ったよ…」

「ああ…あっ…わかる…私の、一番奥まで入ってるのがわかる…」  
「動くよ…」

「ああ、私も女として受け止めるから、最後まで愛してくれ…」

雅緋の言葉に頷いて、ゆっくり腰を動かす

「んんっ…んんっ…ああっ…んんあっ…！」

少しずつ腰の動きを早める

「んっ…はあっ…！私の身体は、んんっ、気持ち良い…？」

「ああ、気持ち良いよ」

「んんっ…あつ、嬉しい、はあっ…、なら、もつと愛して…」

「…雅緋っ！」

「んああっ…はあっ…ああっ…！…うああっ…!!」

雅緋が少しずつ吐息を漏らす

俺は腰を突き出して雅緋の膣の奥を肉棒で叩く

「ああっ…はあっ…んあつ、あああつ!!お、奥にい…！んんあつ、お前を感じれて…んっ！あつ、幸せえ…！あああつ！」

雅緋の膣がさつきよりもぬるぬると愛液で潤って、肉棒を締め上げて来て、俺を絶頂に導こうとする

「俺もっ…雅緋のこと、すっごい感じれて、幸せだよ…」

「ああっ、ああっ！だから…んんっ、私に、もつとっ…もつと刻み込んでくれっ!!女だって、お前の女だってことおっ!!」

俺が肉棒で奥を打ち付けるたびに、雅緋が乱れながら俺を求めるのが愛おしい

「ああっ…はああっ…んああっ…あああつ!!」

「雅緋っ…！出すぞ…!!」

「ああっ！好きなきときにイってくれっ！」

雅緋の膣が締められ俺の肉棒を包み込んで絶頂に誘う

「雅緋っ！中に出すぞ…!!」

「いいぞっ！来て、来てくれえっ!!」

「うああっ…出るっ…！」

「あああああああああああつっ!!」

俺が雅緋の一番奥で射精すると同時に、雅緋の絶叫が部屋に響き渡る

その瞬間、膣が収縮して精液を吸い尽くそうと絞り上げてくる

「くっ…！み、雅緋っ…！」

「あああつ…で、出てるっ…！中に、たくさんっ…！ふああつ…ああっ…あああ…す、すごい…まだ出てるのっ…！」

びくびくと何度も体を震わせて、最後の一滴まで雅緋の膣へと精液を吐き出す

膣に収まり切らなかつた精液が結合部から溢れ出して来る  
精液を吐き出し終え、雅緋の膣から引き抜く

「はあっ…はあっ…いや…い、今抜いたら…溢れるう…」

雅緋の言う通り、膣に収まらなかつた精液が溢れる

「雅緋、大丈夫だよ」

俺はそう言いながら、まだ硬い肉棒を割れ目に当てる

「…ふえ…っ…」

「何回でも注いで上げる」

「ああ、うん。お願い…」

俺の言葉に雅緋が嬉しそうに頷く

「お願い、もっと私がお前の女であることを刻み込んで…」

「もちろんだよ」

俺はそう言いながら覆いかぶさり雅緋を求める

「雅緋…大丈夫か？」

「ああ、たくさん求められすぎて少し危ういがな」

俺の胸の上で俺の顔を覗き込みながら嬉しそうな顔を見せてくれる

「う…すまん」

「謝らないでくれ…私は嬉しかったんだ。今まで私は周りからは男として扱われてきたからな、私が女であるということを感じられて…」

「ありがとう雅緋。まあ、そこら辺の男よりカッコイイしな…」

そう言いながら頭を撫でる

「ああ。だが、お前には負けるがな」

雅緋が微笑みながら言う

「別に、俺はイケメンではないだろ」

俺が言うと

「……そういうことにおこう」

雅緋があきれたように言い

「これで私もお前の女だな」

「当然だ。雅緋はもう俺の女だよ」

そう言いながら

「…ん…」

キスをする

「寝ようか」

「重くないか？」

「全然。それにこのほうが俺の女って感じで良いかも…」

「私もお前の腕に抱かれて、守られてる感じがして幸せだ」

「じゃあ、このまま寝ようか」

「そうだな」

俺の言葉に雅緋が嬉しそうに言う

キスをして眠りにつく

## 特別講師1人目：恋する姫たちの王

今は空き教室に俺1人でいる。何でも霧夜先生が言っていた特別講師が来るとか何とか…

俺が考えていると教室のドアが開いた

「えーと、君が空くん？」

「あ、はい。そうですけど…あなたは？」

「初めまして俺は北郷一刀だ。よろしくね」

こうして今日の特別講師、北郷一刀さんと出会った

「…一刀さんも大変なんですね」

「うん。毎日毎日、追いかけてまわされてるよ」

「それに奥さんが50人ですか…」

「うん。全員に尻に敷かれてる」

一刀さんのテンションがどんどん下がってる

「しかも三国の王ですか…」

「ははは、政務は軍師のみんなが手伝ってくれるし、街の見回りは武将のみんながしてくれるからね、俺なんてほとんどお飾りみたいなものさ」

「いやいや、それでも王様はスゴイでしょ」

苦笑いで答える一刀さんに突っ込みをいれる

「それに夜のほうも…？」

「一週間で一国づつ相手にするからね…みんなが言うにはスゴイらしいよっ…」

「いや、一ヶ月で50人相手ってどっただけ絶倫なんですか」

「まあ、精力剤とかも使ってるからもつんだけどね…」

(それでも異常だろ…)

一刀さんの話を聞いて心の中で突っ込みを入れる

「そう言う空くんもスゴイって聞いたけど…」

「誰にですか？」

「君の奥さんたち…」

「あいつら…」

思わず頭を抱える

「俺も人のことは言えないけどほどほどにしとかないと苦労するよ」

「一刀さんは何か苦労したんですか？」

「……………」

俺の質問に一気に顔を青くする一刀さん

「だ、大丈夫ですか!？」

「大丈夫、大丈夫、ちよつと思ひ出ただけだから…」

「何があつたんですか？」

俺は恐る恐る聞いてみる

「…三国にはそれぞれ王がいるんだよ」

「えーと、曹操、劉備、孫権ですよね？」

「うん。ある日に桃香…………えーと劉備のことね。調子が悪そうだから

話を聞いたんだよ」

「そしたら何て？」

「最近、女の子の日が来ないって…」

「デキたのか…」

「子どもができたって最初は喜んだんだけど…。桃香を慕う子がさ

『桃香様に何をしたら!!』って鈍砕骨って言う鉄の塊みたいな武器を

振り回して追いかけてきたんだ」

「それは…………」

怖い

「それで他の二国の王も子ども、跡継ぎが欲しいってことで迫ってきた上に、2人にもそれぞれ慕っている子たちがいてさ、その子たちにも大剣で追いかけられて暗殺されかけ、落とす穴に落とされてさ…」

一刀さんが遠い目をする



「それで2人にも子どもができたんだけど…」

「だけど…?」

「そしたら他の子も欲しいて言い出して…」

「まさか…」

「うん。休みなしでみんなとエッチしてみんなに子どもができたんだよね」

よ、47人を相手に休みなしとか…

「あの時は死ぬかと思っただよ」

死因が腹上死とか嫌すぎる

「それに最近…2人目、3人目が欲しいて言われてるんだよね」

「それって…」

また50人相手に休みなしか!?

「後、義理の娘にもパパと結婚するって言われてるんだよね」

ひ、1人追加されました

やべえ、俺の許容量を遥かに超えてやがる

「頑張ってください…」

「ありがとう」

俺の言葉に涙を流しながら感謝の言葉を口にする一刀さん

それから一刀さんの話を聞いたり相談したりで10時間が経っていた

「どう?少しは参考になった?」

「ええ、大変」

良かった今日の話を聞いて、俺も今後は気をつけよう

「それじゃあ。俺はもう帰るね」

「はい。ありがとうございました」

教室を出て行く一刀さんに頭を下げる

「……………大変だな」

俺はそう言って椅子に座り

「……………俺は大丈夫かな」

不安がつのである一方だった

★舞い乱れます!?! 美野里編

美野里の部屋

「♪♪♪♪♪」

美野里がキッチンで楽しそうにデザートを作っている。何でも俺の大好物だそうだ

「俺の大好物って何だ?」

首を傾げながらテレビのチャンネルを回す

『続いてのニュースです。日本での一夫一妻制度から一夫多妻制度への変更を賛成多数で可決されました』

「……………」

マジで可決したのか

『えー。一夫多妻にはさまざまな条件がありー』

テレビからは一夫多妻制の認可される条件が流れている

「とりあえず覚悟は決めておかないとか…」

俺がため息をつく

『では、ここで今回の一夫多妻制度を認可する活動をしていた団体の代表である半蔵さんにインタビューをしたいと思います』

『うむ。よろしくな』

校長がインタビューを受けていた

『何故、一夫多妻制を進められたのでしょうか?』

『それはだなー』

俺はそこでテレビを切った

「てか、一夫多妻制が認められるの早くないか？」

「この間言ったばかりだよな、一夫多妻制に変えるって…」

「本当に国会議員全員が校長の弟子なのか」

「俺が校長のスゴさに戸惑っている」と

「おにいちゃん、できたよ〜♪」

キッチンから美野里が俺を呼ぶ

「そっちに行けば良いのか？」

「うん。早く来てね♪」

美野里に呼ばれキッチンに行くと

「うん？何もないじゃないか…」

キッチンに行くとテーブルの上には何もなかった

「もう、違うよ。こっちこっち

「ぶうっ!？」

俺の目の前には、真っ白な生クリームで綺麗にデコレーションされた…おっぱいがあった

「はい、みのり特製、おっぱいケーキだよ♪」

「お、お、お前、なんて素晴らしいものを!!」

思わず叫ぶ男ならしうがないだろ

「ふふふ〜、四季ちゃんが教えてくれたの！みのり、おにいちゃんのために一生懸命作ったんだよ〜♪」

美野里が笑顔で言う

とりあえず四季グジョブ！

「ねー、食べて食べて♪」

美野里がおっぱいを抱えながら言う

「ドンと胸を張る美野里のおっぱいに、おそろおそろ近づき  
「いただきます…」

そう言つて、おっぱいについている生クリームに舌を伸ばす

「……………んあっ」

美野里が甘い声を漏らす

俺は夢中になってクリームを舐める

「あ……………あ、おにいちゃん…んんっ…」

かすかに目の前でおっぱいが震えたような気がした

「はあ……………はあ……………あっ、んっ…おにいちゃんに…おっぱい、ペロペロ…舐められてる…ううっ…」

美野里から吐息混じりの声が聞こえた

ヤバイ、抑えられない

「んんっ…はあん、生クリームが……おにいちゃんの熱い舌で、溶かされて……………」

「はあっ、はあっ…れろ…」

「ああ…ぜ、全部、舐めたら……大事なところ、見え……はふう…」

美野里はぎゅつと両肩をすくめ、ぶるぶると身体を痙攣させている

「あああ…ふあ、おにいちゃん、じよ、上手…くうんっ…！」

ピクン、ピクン、と美野里の上半身が揺れる

それでも舌の動きを止めず舐め続けていると

「んれろっ……………ん!？」

舌先がピンと盛り上がった粒のようなものに当たる

「ひゃんっ!!」

美野里の身体がピクンと痙攣した

これは…乳首か

「おにいちゃん…ダ、ダメっ…！」

「んれろりゆ……………ちゅぷっ」

「ひゃふっ…んっ、はあっ、ダ、ダメだよお!あっ……………そ、そこはああ…!!」

美野里の息が荒くなっている。顔も真っ赤に火照っている

美野里の反応が可愛くて、いつそう激しく舌を動かす

「あふんっ、おにいちゃん…はうんんっ…：…そ、それ以上は、はあっ、んんうっ…っ！」

甲高い嬌声を張り上げたかと思ったら、美野里が身体がビクンと大きく震えた

「はあっ…：…はあっ…」

「美野里、大丈夫か？」

「…んあ？はあっ…イ、イッちやった…」

美野里が惚けたように言い

「うへえくべトベト」

自分の胸を見て言う

「それじゃあ風呂に入ろうか？」

「うん♪」

美野里が嬉しそうに頷き、一緒に風呂に向かう

俺は今、美野里を前に座らせ、美野里の身体を手で洗っている

「おにいちゃんの手…、あ、熱い…」

「そうか…？」

とぼけながら手つきを徐々にいやらしくする

すべすべの肌は、ボディソープのせいでぬるぬる滑り、美野里のぷにぷにした身体の柔らかさがたまらない

「はあ…ふう…：…んふう、ふっ…」

「…：…美野里は可愛いな」

「んふう…：…ふっ…んん…」

美野里のエロい身体を洗いながら感想を言う

美野里の反応が可愛くて、スゲー興奮してきた

「…ホ、ホント…?」

「もちろん。お風呂では身体を洗うだけのつもりだったんだけど、どうも無理みたいだな」

美野里の可愛さは俺の性的な部分を刺激して、欲望を抑えることができない

「おにいちゃん…手がエッチだよお…」

「美野里が可愛いからな」

胸に手を這わせる

「美野里もおっぱい大きいな」

「ふう…:ん、そ、そうかな…?あ、紫ちゃんの…:はあ、ほうが、んっ、大きいよ…?」

「大きさは関係ないさ、俺は美野里のことが好きだからね」

「んんふう…:ふうっ…:う、嬉しい」

美野里が少しこちらに顔を向けながら言う

「ここだけ固くなってる…」

「ふう…:あっ、んんっ!っ、っねっちや…:あっ、ううん…!」

指で乳首を転がしながら、念入りにボディソープを塗っていく  
勃起して固くなっているから、これだけでも楽しくなってくる

「はあ…:あっ、んっ…:ふうっ…:」

「美野里が、こんな声を出すなんて…:もつと聞きたいな」

耳元で囁きながら手で首を撫でる

「ひゃうう…:っ!」

撫でただけで、この反応…:可愛すぎて身悶えしそう

「あっ、んん…:ふうっ…:はあ…:はっ…:」

「こっちも触るよ」

美野里の割れ目にゆつくりと手を伸ばす

「あっ…:うう、んっ!」

風呂場にいることもあつてか、美野里の割れ目はとても熱くなっていた

石けんの類ではない、粘ついた感触が指に乗りかかる

「美野里……スゴイ溢れてる」

「うう、ふう……おにいちやんが、ず、ずっと触ってるからあ……」

「美野里の反応が可愛すぎるからね……」

「ああ……ふっ、んん、はあっ……んふう、ふっ……」

「美野里はつるつるなんだね」

「み、未来ちゃんもつるつるだよ……」

ほう。それは良いことを聞いた

俺はそう思いながら、ねっとり絡みつく愛液を、太ももから割れ目に塗りたくっていく

「はあ……ふう、んん……んふう……はっ、はあっ、んんっ……ふう、はあっ、ふうっ……」

汗も入り混じって、ほどよい匂いが漂ってきた

「ああ……んっ、おにいちやん、さつきから、そこばかり……」

「ごめんごめん。ちゃんとおっぱいも洗ってあげるね」

「ち、ちが……っ、んんっ！か、身体……あ、洗って……ううん……！」

これじゃあいじっているだけで、洗ってないか。でも、止めるのは無理

「あっ……んん……ふうっ、ああっ、はっ……ふうっ、んんふっ、ふっ……」

「美野里は、1人エッチした経験はある？」

「い……んん、一回……」

美野里が恥ずかしいそうに答える

「……少ないんだな」

「ふうっ……んんっ、はあっ……はあ……あっ、ふうっ……んんっ……」

「いつしたの？」

「み、三日前くらい……」

てか、三日前まで知らなかったってことか……

少し驚きながら、指をクリトリスへと運ぶと、こっちも乳首のよう

に勃起していた



「はっ、ああ…んっ、うう、ふう…」

「痛くない？」

「うん…痛くない」

一応、痛くしないように優しく触れているつもりだからな

「はっ、ううっ…んふう…ふっ…」

「もっとおっぱいも揉んで、いじっちゃおう」

「はっ、あっ…んんっ！ふう、ふっ…はあっ、んあ…っ」

指で愛液をすくい取り、クリトリスに塗っていき、空いた手でおっぱいを揉む

「ふう…んっ、ね、ねえ、はあっ…満足した…？」

「もうちよつと…」

「ふう…んっ、はあ…あっ…」

「すごい濡れてる」

もう汗なのか、水なのか、愛液なのか…わからなくなるほど濡れ広がっていた

太ももに滴る液体をすくいとり、美野里も顔近くまで運ぶ

「んんっ…は、恥ずかしい…」

美野里がぷいと顔を逸らす。…可愛い、もう抑えきれないな

「…美野里、いいかな？」

「う、うん。最後まで…して」

「…できるだけ優しくするよ」

そう言いながら、美野里の両足を抱え上げ、その股間から肉棒を覗かせる

「ふええっ!?!やああ…こんな格好…!」

背後から抱っこするような、騎乗位に似た体勢だ

「こ、これじゃ…丸見えだよお!」

「大丈夫、見えてるのは美野里だけだから、むしろ俺のほうが見えてるだろ？」

「そ、それがお、おにいちゃんの…」

美野里の股間から天井に向かって頭を出す、興奮しまくった俺の肉棒を見て美野里が戸惑う

顔が見えなくても緊張してるのがわかる

「こ、このまま……するの?」

「嫌?」

「い、嫌じゃな……ふあ……あ、あああつ!」

美野里のセリフが終わらないうちに、グイツと押し付けるように腰を上下させ、硬い肉棒と割れ目を擦り合わせると、小柄な身体が可愛らしく震えた

「や、やああ……擦っちゃ……ひやああああん!」

「嫌?」

「わ、わかったあ!これがいいっ!んっ、けど……ああんっ、もつとゆっくり……んくううっ」

「これくらいかな?」

肉棒で割れ目を撫でるくらいの優しさで、ゆっくり擦りあわせる

「はああ、んんっ、ふう……う、うん……それで大丈夫……はあ、ああ……はあっ」

割れ目から溢れてる愛液が混ざり合い肉棒を接触してるところをヌルヌルと滑らせた

「んふ……あああ……あああつ、あああくっ……ひやつ、あふうううっ」

「美野里は可愛い声で感じてるね」

「ふえ?そ、そうかな……んっ、ああつ、は、はああ……くふうっ……んんっ」

「気持ちいい?」

「うん……いいっ……スゴイ気持ちいい……っ」

「じゃあ、もつとしないとね」

「え?」

美野里の身体を少し浮かせ、肉棒の先端やカリが美野里のクリトリスに当てたり引っかかる感じで責める

「あああつ、ああああああん!」

「気持ちいいでしょ?」

「き、気持ちよすぎてえ……ああん、ダ、ダメえええ……硬くて熱いの、当たって……ひやうううん!」

「このままイッてみようか?」

「やあああ、みのり、おかしく、あああつ、なつちや…あああーっ」  
刺激によがる身体を両腕で抱え、一方的に責める

「ちゅ…っ」

美野里のうなじにキスをする

「ひやつ…ん、んん…そ、んっ」

「れろ、ちゅっ…ちゅば…っ」

「ひああうっ!？」

うなじから耳に舌を這わせると美野里の両足がビクンと跳ねる

「れろっ…ちゅば、じゅる…」

「ひやはあああん、耳…あああつ、舐めちやダメえええっ!」

ふむ。舐めるのはダメか…

「はむっ…かぷっ…くちゅ、くちゅ…」

「やつ、噛むのも、はうううん、ひあつ、んくうううっ…あつ、ああ

…っ」

耳全体にまんべんなく唾液を塗りつけていく

「なんか、変な感じがするう…」

「嫌だった？」

「う、うう…イヤじゃ…ないけど…ひっ、ああっ」

美野里の割れ目からさつきより大量の愛液が溢れていた。言うならば大洪水だ

「なるほど、美野里は耳を舐められちゃうと感じちゃうんだね」

「そ、その…おにいちゃんの声が、すごく近くで聞こえるから…

ああつ、あ、安心できるらあ…」

「可愛いなあ…もう!はむっ、ちゅう、ちゅば…!」

「ひやああああうっ…あああつ、吸ったり引っ張ったりしちやあダメえー!」

「んちゅ…はむ、はむ…じゅる…」

「ふあああつ…はああくん…ああつ、あああ…」

美野里が大量の愛液を溢れ出しながら、ほんの少しだけ自分から腰を動かし、肉棒を求めるように割れ目を擦りつけてくる

そろそろ大丈夫かな？

「美野里…」

「…うん」

肉棒の先端を美野里の入り口にあてる

「挿れるぞ…」

「う、うん。きて…」

腰を少しづつ上げて行き、肉棒をゆっくりと膣の奥へと侵入させる

「ふうっ…んっ…」

肉棒に水が垂れる感覚がし、下を見ると処女膜を突き破ったのか  
真っ赤な液体が見えた

「痛くないか？」

「はあ、ふうっ…ちよつとだけ…」

美野里が少し苦しそうに頷く

「ぜ、全部入った…？」

「ああ…」

肉棒の先端が壁にぶつかりこれ以上進まない

「少しこのままいようか…」

「ううん。おにいちちゃんにも気持ちよくなってほしい…」

「まだ、痛いだろう？」

「みのり我慢するもん！」

美野里が叫ぶように言い

「だから、お願い動いて。みのりで気持ちよくなって…」

美野里が顔を少しこちらに向け言う

「わかった。少しずつ動くな」

そう言っつて少しずつ腰を動かすと全体的に狭い膣内が肉棒をしめ  
つける

「ふうっ…んん、はあっ…はっ…」

美野里が少しずつだが甘い声を漏らす

「ふうっ…ど、どう？」

「ああ。気持ちいいよ」

「えへへ、よかった」

美野里の質問に素直に答えると嬉しそうにする

「ふう…んんっ…はあっ、はっ、ふうっ…」

「美野里は気持ちいいか？」

「ちよつと…んんっ、だけ、痛い、はあ、けど、ふうっ、気持ちいいよ…んっ…」

美野里の様子を見ながら少しずつ腰を振る速度を上げる

「んんっ、ふうっ…はあっ…はっ…んんっ、ふっ…んふうっ…はあ、はあっ…ああ…」

狭い膣内を押し広げるように腰を打ちつけ、肉棒に絡みつく襞から逃げるように引き抜く。愛液のおかげで、ストロークがスムーズになつてきた

「あうう…んっ…はっ、んん…っ」

美野里の顔を鏡越しに見ると、表情はすっかり緩んでいた

「あっ…はあっ、ふう…んっ…ふうう、ふっ…はあっ、はっ…んあっ…」

「美野里も気持ちよくなつてきたみたいだな」

「う、うん…っ、ああっ、みのりも気持ちよくなつてきたのお…あああっ…」

美野里の表情がだんだん蕩けてきている

「美野里…愛してるよ」

耳元に顔を近づけ囁くと同時に美野里の膣内が肉棒をギュツと掴む

「んあっ…ああっ…う、うん、ふあ、みのりも、ふうっ、おにいちゃんを…愛してる…」

今度は肉棒を膣の奥にと届くように突き上げる

「あっ…んんっ…ふうっ…もうちよつと早く…して…」

美野里が少しだけ身体をよじらせる

「ああ。少し早いペースにしよう」

膣内の入り口から奥まで一気に肉棒を押し付ける

「あ、あああ…はっ、んふうっ、ひっ…ふうっ…んあ、ああっ、はあ…ふう、ふあ…！」

それにあわせて膣内がギュギュと肉棒をほど良い強さでしめつける

「んあっ…っ、おにいちやんの、あっ、おちんちん、ビクビク…してる、ああっ…！」

「美野里の膣が気持ち良すぎて射精そうなんだよ」

「あっ…ホ、ホント…？みのり…嬉しい、ふあっ、はううつ、あはあああんっ！」

美野里が大きく喘ぎまくる

「美野里の膣に射精していいかな？」

「うん…！射精してえ…！みのりに膣にい…っ！」

限界に近づくとつれ腰の動きを早くする

「あああ…っ、ふああああんっ、んん…あああっ！」

膣内の奥を突いた瞬間、美野里の身体が少し反り膣がギュツとしまり肉棒を包み込み、スゴイ快感を感じ、射精感が込み上げてきた

「はっ、はあっ…みのりの膣で…っ、んんっ、射精して、ああ…あっ、はあっ…んあああ…っ！」

「…射精る！」

肉棒を膣の奥に押しつけ精液を流し込む

「あはあああああ…っ！！」

美野里も絶頂を迎える

「ま、まだ…！」

射精しながら腰を動かし、もう一度、美野里の奥で射精し精液を流し込む

「ひゃあああん！まだ、膣に射精てるう！」

美野里が嬉しそうに喘ぎながらももう一度絶頂を迎え、膣が肉棒を痛いくらいにギュと掴んで離さない

「はあ、はあ、…めちやくちや気持ちいい…」

「はあ、はあ、みのりも…」

美野里が惚けながら言う

「美野里…」

美野里の顔を少しこちらに向け

「んっ……ちゅ…」

キスをする

「えへへ、いっぱいみのり膣なかに射精だしてくれたね」

「ああ」

「でも、おちんちん硬いまんまだね」

美野里が膣なか（なか）で大きくなっている肉棒を感じたのかそうつぶやく

「ああ。美野里が可愛いからしようがないんだ」

「じゃあ、もつとしようよ〜！」

「お風呂に上がってからの。このままじゃお互いのぼせちゃうだろ？」

俺は美野里の膣なかから肉棒を引き抜いて湯船につかり胡坐をかき

「おいで…」

美野里を呼ぶ

「うん〜」

美野里が元気良く返事をし、湯船に入ってきて胡坐をかいた俺の上に勢いよく乗ると

「ひゃん〜」

まだ硬い肉棒が美野里の膣なかに入り、頭を俺の胸に埋める

「美野里は甘えん坊だな」

美野里の頭を撫でながら言う

「このまま、もう一回しようか？」

「えへへ、うん♪」

俺の言葉に美野里が嬉しそうに頷く

「おにいちや〜ん♪」

一緒にベッドで寝ていると美野里が嬉しそうに抱きついてきた

「本当に甘えん坊だな」

美野里の頭を撫でる

「えへへ、おにいちゃん♪」

「美野里、いい子だから寝ようね」

そう言いながら美野里にキスをする

「えへへ、うん♪」

美野里が嬉しそうに頷き、俺たち眠りにつく



★舞い乱れます!? 飛鳥編

飛鳥の部屋

「飛鳥…」

「ん、んうー」

飛鳥を抱きしめながらキスをする

「はあ…」

身体を離すと同時に、飛鳥がうっとりしたように息を漏らす

「飛鳥…」

そんな彼女をもう一度強く抱きしめキスをする

「ん、んふあ……」

さつきより強く抱きしめたことで、彼女の鼓動と熱が、俺の中に流れ込んでくるようでとても心地がいい  
ずっとこうしていたくなるように――

「あ、んっ……ん、んんう……」

彼女の唇をついばむように優しくなぞる

「んふあ……ん、ちゅい……んく……」

飛鳥も最初は俺にされるがままだったが、徐々に飛鳥からのお返しのキスも増えていく

飛鳥が一生懸命に俺を求めてくれるのが嬉しい

「ん!?!」

俺が舌を入れると飛鳥が一瞬だけびっくりし

「んく、んふう……ちゆる……んれろ」

飛鳥も舌を出して受け入れてくれる

「ちゆる、んく、んふう、んちゅー」

飛鳥が探り探り舌を出してくれるので、それを舌で受け入れ互いに舌を絡ませる

「あーんふあ、ん、んれろ、ちゅぱ、ちゆる……んん、ちゅつつ……」

心地よい口づけに俺から多く求めると、飛鳥が受け入れようとしてくれる

「んふあ、あ、んうーんっ……」

一生懸命答えてくれる彼女が欲しい、という欲望が俺の中でどんどん増す

「ーん、んふあ……んはあっ」

一度、唇を離し

「……飛鳥」

目の前に居る愛おしい彼女の頬を撫でながら名前を呼ぶ

「……うん、お願い」

飛鳥がこちらの意図を汲み取ったのか、頬を少し赤く染め小さく頷く

「飛鳥……」

俺は飛鳥の膝の裏に手を入れ、そのまま持ち上げる。まあ、お姫様だっこってやつだ

飛鳥は俺の首に手を回し安定したのを確認してベッドに近づいて行く

「私、これから……」

「ああ。俺の女になるが……嫌か？ 今ならまだー」

「ううん。そうじゃないの嬉しいけど不安なの」

飛鳥の俺の首に回している手の力が少しだけ強くなる

「不安？」

「幸せすぎて夢なんじゃないかって…」

俺の質問に飛鳥が答える

「ハハ」

「む、何がおかしいの？」

俺が笑うと飛鳥がムツとした顔をする

ベッドに近づいたところで

「バカだな、夢なワケないだろ」

そう言いながら、そつと飛鳥の身体をベッドに横たえ

「それを教えてあげる」

飛鳥のYシャツのボタンを外し、ブラに包まれた大きな胸を露にし

「ブラジャーは外すよ」

そう言いながらブラを外す

「あ…」

乳首が出て来て、飛鳥の素晴らしい綺麗なおっぱいが露になる

「飛鳥、触るよ」

飛鳥のおっぱいにゆっくり手を伸ばし優しく触れる

「んふっ…」

俺の手がおっぱいに触れると飛鳥の体が少し跳ねる

「痛かったか…？」

「だ、大丈夫、男の人に触られたのが初めてで、ちよつと驚いただけだから…」

「…そっか」

飛鳥の言葉に少し曖昧に答える。いや、だって、飛鳥のおっぱいの感触が半端ない

ほど良い弾力に手には収まりきらない大きさ、肌もスベスベしてて触ってるだけでも気持ち良い

「飛鳥、少し力入れるよ」

「あ…う、うん」

飛鳥が頷いたのを確認して、手に少し力を入れる

「んはーあ、ふう…んっ…」

飛鳥が身をよじるのと同時に内ももを擦り合わせているのがエロい

「飛鳥…」

彼女の名前を飛びながら顔を近づけると

「あ……んうっ」

飛鳥もそれに答え目を閉じてキスを受け入れてくれる

そのまま、少し強めにおっぱいを揉む

「ん、んふ……んう、んんっ…」

口からくぐもった声が漏れ、彼女のおっぱいを揉む度に彼女の体があたたかくなるのを感じる

「ん、んふう……もつと、お願い、もつとして…」

飛鳥が俺の首に手を回し、甘えるように言ってくる

言われなくても。

俺はそう思いながら再びキスをし、彼女のおっぱいの感触を楽しみながら、その頂点に指を伸ばし—コリコリと指でいじると

「あ、んふあっ……ん、んんっ…」

今までで一番強い反応が返ってきた

反応が可愛いな、と思いながら、乳首を指先でつまむようにしておっぱいをいじる

「ん、んふうっ！ あ、ん、ああっ…」

ひくひくと身をよじらせる姿が可愛い

彼女の反応を見ながら右手で乳首をいじり、左手はおっぱい全体を撫でる

「は、あう……んん、もう胸ばっかり、んうっ」

飛鳥が感じてはいるが、物足りなそうな顔をする

ふむ。おっぱいばかりは嫌か…。

俺は飛鳥の反応を見て、左手を彼女のお腹の方へはわせ、指先で体のラインを確かめるようになぞっていく

「んんーっ、んひゃあ…ああっ…」

くすぐったそうにしながらも、飛鳥の口から喘ぎ声漏れる

その反応を見て、手を更に下へ送り、彼女のおしりを撫で、太ももから足へと手を滑らせる

「は、んふう、んく…」

「飛鳥、気持ち良い…？」

飛鳥の反応を見ながら、俺が意地悪く質問すると

「…もうわかってるくせに…」

飛鳥が拗ねるような反応をする。超可愛い

「飛鳥…」

俺が彼女の内股に手を滑り込ませる

「う、うん」

俺のやることを理解したのか、飛鳥が顔を赤くして戸惑いながらも頷く

飛鳥が頷いたのを確認し、押し開こうとすると抵抗される

「飛鳥…？」

拒否されたのかと思い飛鳥を見ると

「ううん、違うの」

飛鳥が俺の言葉に首を横に振り、誘うように自ら足を開く。その姿は扇情的で俺の欲望を刺激する

良くみると、飛鳥の下着が隠しているはずの大事な部分が愛液で濡れシミができていた

「そ、そんなに見ないで…」

「ああ、わかった。それじゃあ、その代わりに触るな？」

「えーあ、んふうっ…！」

戸惑う彼女にキスをして唇を塞ぎ、飛鳥の綺麗なおっぱいを俺の思うがままに揉み、彼女の割れ目を下着の上から指先で優しくなぞる

「んひゃっ……ああっ！」

飛鳥の体が少し跳ねる

「…すごいことになってるな」

「し、知ってるから…言わなくていい、んふう…」

飛鳥が顔を真っ赤にして、声を漏らさないように我慢する

そんな彼女を見て、もつと彼女が乱れるのを見たいなどと思い、今度は割れ目の中心を指で押すと彼女の割れ目から、くちゅ、くちゅ、と音がする

「や、音…音が、して…んんんっ！」

少し指を割れ目に押し込むだけで指先がべっとりする

「お、お願い、聞かないで…あ、んふああ…あああっ…！」

涙目でお願いされたら逆にもつとしたくなるに決まってるだろ！

「飛鳥、大丈夫だよ。俺で感じてくれてるんだろ？ もつと感じてくれ」

「そ、ん、んんん、んくうー!!」

飛鳥が何か言う前に下着の中に手を入れ、飛鳥の秘部を直接接触すると、彼女の声が切羽詰ったものとなり、そのままびくんと身体が震え

「んあ、ああ、んあああーっ！」

つま先をぴんと伸ばし、飛鳥が大きく震えるのと同時に、ひくひくと秘部の肉が震え、どろりとした愛液をはき出した

— イッたのか

「んはあ…あ、ああ…ん、んふう…はあ、はあ…はあ…」

余韻で小刻みに震えながら、飛鳥が呼吸を整えていた

「…大丈夫か？」

「~~~~」

飛鳥が顔を真っ赤にし涙目になって、首を横に振る

や、やりすぎたか

でも、その反応は俺の欲望を刺激するだけだから逆効果だぞ飛鳥  
「飛鳥、お前の可愛い姿を見てたら我慢できなくなった」

「う、うん。私も今すぐひとつになりたくて我慢できないの、だから」

飛鳥がそつと俺のほうに手を伸ばして

「お願い。私を抱いて」

甘えるように俺を求めてくる

「飛鳥」

俺は名前を呼びながら飛鳥の身体に覆い被さった…

飛鳥のパンツを少しずらし割れ目を露出させ、そこに肉棒の先端を押し当てる

「そ、それが……」

飛鳥がガチガチに勃起した肉棒を見て緊張しているのがわかった

「飛鳥の、愛液が溢れてるな」

「ま、真顔で言わないでよ！ 私だって恥ずかしーんはあ！」

顔を真っ赤にしながら飛鳥が叫ぼうとしたところに、少し腰を動かし肉棒をで割れ目を少しなぞると飛鳥が背中を少しのけ反らせながら声をあげる

そんな飛鳥を見て俺は—

「飛鳥、もう我慢できない…」

飛鳥の顔を見ながら真剣に言う

「う、うん。私も覚悟はできてるから…」

飛鳥も俺の真剣さに気付いたのか覚悟を決めた表情で頷く

「できるだけ優しくするから…」

俺がそう言う

「私は大丈夫。あなたに初めてを捧げられて嬉しいの、だから—」

飛鳥が俺の頬に両手を当て

「絶対に途中でやめないで、最後までお願い」

そう言いながらキスをしてくれる

「ああ。わかった」

俺は頷きながらゆっくりと腰を押し進めた

肉棒が柔らかい肉に埋まり―

(これは…)

弾力の壁にぶつかりつたので、一旦腰を止める

「ん、んくう…んっ…」

飛鳥が少し痛そうにしている

(やっぱり、今先っぽに当たってるのが飛鳥の処女膜…)

彼女の様子を見て俺は確信し

「飛鳥、行くぞ」

「ん…」

俺の言葉に飛鳥が小さく頷くのを確認して、止めた腰を押し進めると

「んあ…あ、ああーんくう！」

飛鳥が必死に声を押し殺す

多分、俺に心配をかけまいとしてくれてるんだろう

そんな彼女の決意を感じ、一気に彼女の中を貫く

「んあんんんっ…!？」

飛鳥が痛みに耐えながら声を出す

そんな彼女を愛おしく思いながら腰を動かし、肉棒を進めると最奥に突き当たる

(狭い。けど、ピッタリとまとわりついてくる温かい感触が気持ちいい…)

視線を少し下げ、結合部分を見ると一筋の血が流れていた

「はあ…んなあ…はあ…」

「飛鳥…全部入ったよ」

頑張ってくれた彼女の頬を撫でながら優しく声をかける

「ほ、本当？」

「ああ、頑張ったな…」



俺がそう言うよ

「う、ううん。まだだよ」

飛鳥が首を横に振り

「私は君の彼女なんだよ、ちゃんと最後まで可愛がってくれないと嫌…」

拗ねるように言いながら俺の腕を掴む

「わかってるよ。飛鳥の俺の大切な彼女だもんな…」

そう言いながら少し腰を動かす

「んあ、あ……ああ、んふっあっ?!」

飛鳥が驚いたような声をあげる

「飛鳥、大丈夫か?」

「ううん。ちよつとビックリしちゃっただけだから…大丈夫」

飛鳥はそう言うが少し痛そうだな、やっぱり最初は優しくだな

俺の理性が保てば、だけどね…

そう考えながらゆっくり腰を動かす

「ん、んああ…んっ、中で…動いてる」

「ああ、飛鳥の中で、動いてるよ」

「んんっ、奥まで、届いてるよ…んはあっ」

互いの行為を確認するように言葉を重ねる

「もっと…激しく動いても、いいんだよ?」

「ん、今でも充分気持ちいいから」

「でも…」

飛鳥が俺の言葉に不満そうにする

「飛鳥、俺だけ気持ちよくなっても嬉しくないよ。飛鳥にも気持ちよくなつて欲しいんだよ。だって、飛鳥は俺の大切な人なんだから…」

彼女の頭を撫でなが優しく諭すように言うと

「う、うん」

飛鳥が嬉しそうな顔をして頷いたのを確認してさつきより少し早く腰を動かす

「ん、ああっ、あ、んふあっ…」

飛鳥の中が俺の肉棒を離さないようにとギユとしまる

「ん…んう、あ、んはああ…んんっ!」

肉棒を半分まで一気に奥まで突き上げると飛鳥がのけ反る

その時に大きく揺れたおっぱいを見て俺は—

「んひゃんっ?!」

おっぱいを揉みながら乳首を甘噛みすると、飛鳥が大きく反応した

「ちよ、ちよっとなに…んふあっ、ああ…っ!」

「飛鳥のおっぱいが美味しそうで…っ…っ!」

不満そうな飛鳥について正直に答えながら腰の動きを速める

「お、美味しそうって、んん—っ!」

飛鳥は嫌そうな声をあげるが、反応を見る限り感じてるのがわかる

「あ、や、ん、んう…おっぱいダメだよお、あ、あはあ、おっぱいだけじゃ、んはああ、なくてえ…」

飛鳥が快感に身悶えながら、蕩けた顔で懇願するように言う

彼女も限界なんだろうが、正直に言う俺も限界が近い

「ん、んふうあ…あああ、中で、大きくなって、んはああっ!」

「ああ、そろそろ限界だ」

俺がそう告げると

「このまま、ああ、出してえ、んん…っ!」

飛鳥が俺を逃がさまいと自分の足を俺の腰に回ってきて自分のほうに引き寄せよせる

彼女に言われなくても、俺自身が彼女の膣内に全て注ぎ込むつもりで腰を振る

「飛鳥—このまま、行くぞ」

「うん、来て、来て—んんはあ、ああ、あああっ!」

俺は飛鳥の腰に手をおき自分のほうに引き寄せながら腰を打ち付ける

「はあ、はあっ! んん、はあ、はああ、あああっ…っ…!!」

「飛鳥、出るっ…」

「あああ、中に…いっぱい、出して…っ！ はあ、ああ、私の中、全部、あなたで満たして…あああ、んんっ…!!」

射精を我慢するのも限界が近づいて来て、肉棒を膣の奥へと打ちつける

「ああ、あああ、すごい…来てる、わ、私も、もう…あ、あああっ…!!」

飛鳥の膣内がビクビクと震えだす

「くっ！」

俺はこれでもかと肉棒を奥に押し付け

「出るっ…！」

彼女の奥に何度も射精する

「ふあ、ああ、あああー！ ん、んふ、んくうああああ!!」

飛鳥が射精を奥に受け、ビクビクと激しく痙攣する

それと同時に膣内がさらにしまり、俺の中で再び射精感が込み上げてく来て飛鳥を抱きしめる

「ん、んんう…!!? まだー出て…んはっ！」

再び彼女の奥へと射精する

「はあはあ…」

互いに呼吸を整え見つめ合い

「ん、んちゅ…」

キスを交わす

「ちゅう…ん…、はあはあ、大きいままなんだね」

飛鳥が、自分の中でガチガチなままの肉棒を感じながら言う

「飛鳥の中がスゴイ気持ち良かったからな、全然し足りないんだよ」

「そうなんだ。私の中気持ち良かったんだ」

俺の言葉に飛鳥が嬉しそうな顔をする

「飛鳥…」

俺が彼女の名前を呼ぶと

「うん。もつと来て…」

両手を広げて俺を迎え入れようとしてくれる

そんな彼女に、俺はキスをしながら再び覆い被さる

「♪♪♪」

「何か楽しそうだな」

ベッドで一緒に横になりながら、俺に抱きついて鼻歌を歌っている  
飛鳥を見ながら言う

「え、そうかな?」

「ああ。スゴイ幸せそうだったぞ」

「だって、好きな人と一緒にいられるんだよ。幸せに決まってるよ!」

屈託の無い笑顔で飛鳥が言う。

「何この子、超可愛いんだけど!」

「空くんは私と一緒にいれて幸せ?」

飛鳥が上目遣いで聞いてくる

「ハッ! そんなこと言わなくてもわかるだろ?」

俺はそう言いながら彼女にキスをし

「超幸せだよ」

笑顔で答える

★舞い乱れます!? 焰編

「焰」

焰の部屋の前に立ち扉をノックしながら名前を呼ぶが、まーまーまーまーとたく反応がない。

おかしいな、行くよって昼に話したら、焰も「わ、分かった。覚悟しておこう」って言って言ったんだけどなー。

そう不思議に思いながらドアノブに手をかけると鍵がかかってない。

「あれ？ 開いてる」

無用心だな、と思いながら部屋の中へ入ると

『う~~~~』

前に焰に見せてもらった「ヤドカリ！」とかいう一発ギャグの格好——布団を上から被り、丸出しの尻をこちらに向けながら呻き声を上げている焰が居た。

ふむ、日焼けの痕が残る健康的な小麦色の尻は…良いな、うん。

「じゃなくて！」

焰のエロい尻に見惚れている自分に大きな声を上げながらツッコミを入れる。

危ない危ない、そのまましゃぶりつく所だった。

しかし、尻が丸見えてこっとは忍装束か…俺と本気ってことか？

「焰、何してるんだ？」

未だに布団を被って隠れているつもりで焔に近づいて、布団の上から手で彼女の体を揺する。

『く、空か!? い、いつ来たんだ!?』

「つい今し方だが、何でお前は布団を被っているんだ?」

『そ、その、いぎ! と思っただけ急に恥ずかしくなってしまっただけ…』

いつもの男勝りの口調はどこへやら、しおらしい喋り方になっている。カワイイ。

「何で急に恥ずかしくなってるんだよ」

『だって、お前と出会うまであまり女扱いなんてされなかったし…』

「そうか? 春花とかは普通に女の子扱いしてたと思うが…」

『は、春花は、私を玩具にして遊ぶためだ!!』

うん。まあ、それは否定できないが……。

「ほら、葛城さんとかも…」

『あいつは女の胸ならば誰でもいいんだ!!』

それは……否定できないな。

あの人、俺と初めて会った時は飛鳥の胸をずと揉みしだくってたからな。その後、雲雀ちゃんの胸を揉んで柳生にぶつ飛ばされてたしな。

『だ、だから、私は女として、そ…その、あまり自信が持てないんだ!!』

ん? 今の話を聞いてどうして女として自信が持てないんだ?

「なあ、焔」

『何だ?』

「何で今の話しの内容から、女として自信が持てないんだ？」  
『だから言ったろ！ 女扱いされて来なかつたって!!』

……いや、それは周りが女子だけだったからだろ。周りが女子だらけの環境でどうやったたら女子扱いされるんだよ、あれか……百合か。でも、焰みたいな女の子が合コンに参加したら99%泣いて喜ぶぞ。ちなみに俺だったら泣いて喜んでる自信がある。

「まあ、要するにだ。女扱いされてこなかったお前が、いきなり男女とのかつことをすることになって、どうしていいか分からなくなったと」  
『まあ、概ね合っている』

でも、お前俺と3桁は軽く超えるぐらいキスはしたよな。キスは恥ずかしくないのか？

まあ、でも、このまま会話しても出てくる気配はないし、下手すると一晩中こいつはこの状態だろうな。

少しは強引な手に出るか。

「恥ずかしいのは分かったが……いいのか？」

『いいのかつて、何がだ？』

「さつきからお前のエロい尻が丸見えなんだが」

「え!?! 嘘だろ!」

俺の言葉に反応して、驚いた声を上げた焰は、被っていた布団をどかし上半身を起こし俺と向き合う形になる。

焰と向き合う形になった瞬間、右手で彼女の左手首を掴み仰向けに押し倒し、そのまま覆いかぶさる。

「っ！ く、空――」

焰が驚いた表情で何かを言おうとするが――

「んーん、んっ……」

互いの唇が触れるだけのキスで口を塞ぐ。

しばらくキスした状態のまま時間が過ぎ、掴んでいた彼女の左手首をはなし身体も離れる。その際に唇も離れる。

「あ……」

唇が離れた時に焰が残念そうな表情で小さい声をもらす。

「焰……」

残念そうな表情をしている焰の名前を呼び頭を優しく撫でる。

「く、空……」

いつもの強気な性格はどこへやら、今は胸の前で両手を組んで恥ずかしそうにしている。

「焰、良いよな?」

焰の頬に手を当て声をかけ顔を近づける。

「……うん」

焰は頬を少し赤く染めながら小さく頷く。

普段とのギャップがありすぎだな……可愛すぎる。

「ん……んちゅ……ん」



焰の可愛さに内心で身悶えしながら再びキスをし、彼女の唇を貪る。

「あ、ん……んふぁ……」

焰も最初はされるがままだったが、だんだん焰ものつてきたのか、次第に自分から求めてくるように唇を貪ってくる。積極的に求めてくる焰の口の中に舌を捻じ込む。

「ん、んふう……ん……んちゅう、んん!!」

焰もいきなり舌を入れられたことに驚いて目を見開くが、俺の舌を焰の舌に絡めるようにすると、意図が伝わったのか、焰も恐る恐る自分から舌を絡めてくる。

「ん、んちゅ……ん、んく、ちゅう……」

舌を絡めてきた焰に昂る欲望のまま遠慮なくどんどん舌を絡めていく。

「ひゃう、んっ、……ちゅぷ……ん」

それに答えるように焰も一生懸命舌を絡ませようとしてくる。最初こそ男女の雰囲気緊張して硬かったが、雰囲気に慣れてきたのか柔らかくなりもつと積極的になってきた。

そろそろ大丈夫かなと思って右手で服の上からでも分かる焰の大きいおっぱいを驚掴む。

「あ、ん……ん、ちゅ、あむ……んんっ!!」

すると焰が驚いた声を上げる。

そんな彼女のことを気にしつつも、自分の欲望に従い焰の豊かなおっぱいを揉む。

「んっ!! んふあ、く、空、んく、んぶふあ、す、少し待て!」

焰が慌てた様子で揉みつつづける俺の右手を掴む。

手の平から伝わる幸せ感触を惜しみながらも離そうと、手の力を緩める。

「……嫌だったか? わー」

「い、嫌なわけないだろ!!」

俺の謝罪の言葉に焰が被せるように叫び、掴んで離そうとしていたと自分のおっぱいに触れさせる。

おお……素晴らしい感触だ。

再び訪れた幸せな感触に再び感動していると

「そ、その…直接接触って欲しい」

焰が恥ずかしそうにつぶやきながら上着のボタンをはずしていく。

俺はただ目の前でボタンをはずしていく手を視線で追っていく、少しして焰が上着を脱ぐと、彼女のおっぱいを押さえつけているさらしが目の前に現れる。

「っ…」

焰は少し頬を赤く染め恥ずかしそうにさらしをはずす。

「おお!!」

焰がさらしをはずした際に、彼女のおっぱいが揺れ俺の視線が釘付けになり、感歎の声が漏れる。

「ほ、ほら」

俺の反応に焰は少し驚きながら、おっぱいを差し出すように前に出す。

焰の言葉に俺は黙って頷きながら、右手でおっぱいを鷲掴みにする。

「くっ……んっ、ふうっ…」

今度は揉むだけではなく、乳首を指で摘みながら全体を優しく撫で回すように動かす。

「んっ、んあ、んんっ！」

右手を動かすと、焰が合わせるように喘ぎ声をもらしながら身体も震え、気持ちいいことを知らせてくれる。

そんな焰の可愛い反応を見た俺は、たまらずキスをする——今度は最初から舌を絡める深いキスを。

「あ、ん、んちゅ……んく、ちゅ、あむ…」

焰も舌を絡ませるのに慣れてきたのか積極的に舌を絡めてきた。

「んく、れろろ……ちゅっ、んふい、んちゅう……」

俺が体重をかけるようにゆっくりと身体を擦り付けると、焰が腕をまわしてきて抱き寄せようとしてくる。

「んっ、れろ、んっく、あむう……ちゅ」

少しの間そのままキスを続けていると、焰がキスの合間から扇情

的な吐息を漏らしながら足が少し落ち着きのないようにモゾモゾと動かす。

準備ができ始めたかと思いつながら、空いていた左手を焰の股間へと伸ばすと、下着の上からでも分かるほど濡れていた。

「ちよ、んむう、んちゆ、んつく、んむう……」

いきなり膣穴を触られたことに驚いた焰にキスをし黙らせると、右手でおっぱいを揉み、左手の指で下着の上から膣穴を押しつける。

「くううんっ、んっ、んむう……っ！」

焰の反応が大きくなり呼吸が荒くなる。

俺も俺ですっかり昂ぶってしまい、ペニスがすっかり勃起している。

それを彼女に伝えるために、服の上からでもわかるペニスの勃起によつてできたテントを彼女の太もものあたりにおしつける。

「っ、ふう、んっ、れろ、んつく、ちゆ……くむう」

俺が勃起していることに気付いた焰は、おっかなびつくりの手つきで服の上から俺のペニスを触る。

「……焰」

俺が彼女の名前を呼ぶとトロンとした目つきで静かに頷く。

焰が頷いたのを確認してペニスを取り出し、下着の上から彼女の膣穴へと先端を当てる。

「ひうっ！」

初めての感覚に驚いた焰が声を上げる。だが、正直俺も我慢の限界のため、彼女の下着を少し乱暴に脱がす。

「~~~~っ」

自分の秘部が丸見えになったことで焰の顔が真っ赤に染まる。

そんな彼女を気にしながらも、ペニスの先端を彼女の膣穴の入り口まであてがう。

「…行くぞ」

俺の言葉に焰は黙って頷き、俺の首の後ろへと手を回す。

焰が頷いたのを見て、ペニスを膣中へと侵入させる。

「あ、んああ…ああ、あああ——」

中へと侵入させていくと、熱い肉の壁に迎えられ、とてつもない快感に襲われる。

「熱いのが、入って…：…んん」

焰が震える声で囁きながら、回している震えている腕に力を込め自分のほうへと抱き寄せる。

必死に俺を抱き寄せる焰の表情は痛みに耐えているように少し辛そうだった。

やはり痛いのか…と焰の心情を察しながら細心の注意をはらいながらゆつくりと腰を動かす。

「んふあ…は、あ…んん」

腰を動かすと、焰は声を漏らす。だが、やはり痛いであろう。回

している腕に籠められている力がどんどん強くなっている。  
そんな彼女の痛みを少しでも紛らわせるために、キスをする。

「んん、んあ、あ……んふあ、はあっ、んんっ！」

少しは痛みが紛れるのか、焰から積極的にキスを求めてくる。

焰の様子を見ながら腰の動きを徐々に速くしていく。

腰を動かす度に抵抗の強い膣肉を押し退けながら奥へと侵入していくペニスに快感が襲う。

「あ、んんっ、あっ……や、んふっ……あっ、んんんっ！」

焰に気をつかいながらも自分の欲望に従い動きを激しくしていくにつれ、キスの合間に声が漏れる。

「んふう、はあ、あ、ああん、んふあ……はあ……！」

腰を動かすたびに焰が喘ぎ声を上げるが、痛みに耐えるような辛そうな声。

焰は痛みに耐えながらも、俺を求めるように回した腕に力を強める。

焰の想いに応えるように彼女との行為に没頭していく。

「はあ……ん、ああ、これが、ん、あ、ああっ！ んんんっ！」

痛みが引いてきたのか、焰の喘ぎ声が大きくなる。

その声をもっと聞きたいと、それまでと違う、気をつかわない膣奥へと打ちつけるように激しく動く。腰を動かすたびに結合部から愛液が垂れ流れる。

「あ、はあ、す……んんんっ！ ああっ、あっ！ んんんっ！」

奥に打ちつける度に膣内が締め熱い膣肉がペニスを包み込みとてつもない快感を得る。

もつと快感を得るために再び奥へと激しく打ちつける。

「ん、んはあ、あ、あああ、お前のが、んっ。私の中で、ああっ！ 激しく暴れてる…んんっ！」

焰が嬉しそうな声音で耳元で囁く。

普段とは違う甘えるような声に想わず射精しそうになるが、男の意地で耐え腰を動かす。

「んん、いまあ、あ、あっ！ 中でビクビクして、んはあっ！」

焰が膣内で動くペニスの動きを感じ取ったのか、少しだらしない顔で俺を見つめながら言う。

「ああ。実はもう限界なんだが、焰のおまんこの中をもつと感じたくて必死に我慢してるんだ」

俺は焰の言葉に素直に告白する。

正直、もう限界なのだ。奥を突く度にペニスを離さまいと強烈に締まる熱い膣肉の感触が果てしなく気持ちいいのだ。

「ん、出しているぞ。んん、お前に、ああっ！ 気持ちよくなって、あっ！ 欲しいい！ もつと！ 激しく、求めてくれえっ!!」

焰の言葉で内心で頷き、彼女の膣内を貪るように腰を激しく動かし、ラストスパートに入る。

「あ、はあ、あ、ああ…んん、あんっ。んんんっ、あ、あああ…っ！」

彼女の事を考えない獣のような欲求に従い、彼女の膣内にある快感を求め奥を突き上げる。

腰を打ち付ける度に俺の中で射精感が上り詰めてくるのを感じ

「焰、限界だ…このまま—中に出すぞ！」

「ん—来い。全部…受け止める—っ！」

最後の気合で、膣内の一番奥を突くのと同時にペニスが震え、膣奥へ大量の精液を放つ。

俺が射精したのと同時に焰の身体もビクと跳ねる。

「んあ、熱いつ、熱いのが…中に、いっぱい。んんんっ」

膣内で俺が射精したのを感じた焰は嬉しそうに言った。

少しの間、互いに果てたままの体勢で少しだけ息が整うの待つ。

「はあ…はあ、んく…出しすぎだぞ、まったく」

焰の言葉は責めるようだったが、その表情と声はとても嬉しそうだった。

そんな彼女を見て再び俺の中で彼女を求めたい欲求というが増大する

「……焰」

「ん、何だ？」

目の前にいる愛しい女性が不思議そうな顔をするので言葉と同時に行動で示す。

「ごめん。もう一回」



そう言いながら彼女の膣内に収まったまま、再び勃起したペニスを彼女の膣内を味わうために、腰を動かす。

「え、ちよつ、んああっ！ あああー！」

再び膣内で動いたペニスの感触に焔は喘ぎ声を上げ、回していた腕に力を込め。

「んんっ！ しょうが、の、あ…ああっ！ ない…んあっ！ やつだ、んあああっ！」

優しく微笑みながら、俺の欲求を受け入れてくれた。

「…まったく、お前というやつはとんでもなく底なしだな」

行為を終えた後、焔を後ろから抱きしめるような形で一緒に浴槽に浸かっていると、目の前にいる彼女がどこか呆れたように声をかけてくる。

結局、焔が気絶するまで続けてたからなあ……。

「はは…、ごめん」

「べ、別に怒っているわけではない。ただ…」

「ただ？」

「そ、その、エッチだけではなく、恋人らしくゆつくり一緒にいたかつ

たなあ…と」

焰の言葉に嬉しくなり、腕に力を込め彼女を強く抱きしめる。

「今度はゆっくりイチャイチャしような」

「ああ」

焰は手を俺の手に重ね小さく頷いた。

★舞い乱れます!? 両奈編

「ご主人様、待ってたよ〜」

両奈の部屋に入ると、俺を待ち構えていた彼女が俺の手をとって部屋の中へと連れて行く。

こんな嬉々として自分を迎え入れてくれる彼女に、気恥ずかしさを感じながら胸が温かくなるのを感じ彼女についていく。

「じゃ〜ん! この時のために準備しておきました」

両奈の言葉に疑問を感じながら部屋の中を覗き……頭を抱えた。

彼女の部屋の中に用意されていたものは―鞭、蠟燭、手錠、アイマスク、猿轡、ロープなどの所謂S Mプレイで使われるような道具ばかりだった。

「あ〜ん! ご主人様にこの鞭で……」

両奈は近くにあつた鞭を手にとると、何を妄想をしているのか……だらしない笑みを浮かべている。

ああ、この子は初めて会った時からこんな感じだったなあ……。

残念美人という言葉がホントに残念なほど似合う。

「あう〜ん! ご主人様にどんな風に調教いじめられるのか楽しみ〜」

「……両奈」

1人で勝手に盛り上がっている両奈を呼び、俺の目の前の所を叩いて座るように促す。

すると、両奈は嬉々とした表情で俺と向かいあう形で座る。

座るといっても、普通に座るのではなく、犬の躡の待てのようにヤンキー座りで足を前回に開く。

当然、彼女のパンツが丸見えなのだが、両奈はそんなことを気にしない素振りを見せる。

「両奈、普通に座ってくれ。下着が見えてる」

「ご主人様ならいくらでも見ていいんだよ」

「……両奈、ちゃんと座れ」

「あ、は〜い」

俺が命令するように言うと、両奈は嬉々とした表情で正座する。

「両奈、お前初めてだろ？ それでいきなりSMというのは―」

「あう〜くん!! ド変態のマゾ豚ペットの両奈ちゃんに気を遣っていただき、ありがとうございませう主人様」

両奈は俺の気遣いの言葉を遮って、自分の身体を抱きしめ歓喜に震える。

自分のことを雌豚と貶しながら、俺にどのような罵声を浴びせられながら、メチャクチャにされるのを力説する両奈を見て、俺は思った。

―ああ、この子ホントにダメだ、この子は真性のマゾなんだ。

両奈のどうしようもないド変態具合に俺は諦める。

「それじゃあ〜」

両奈が悪戯な笑みを浮かべて俺を見ると、自らの制服の胸元に手をかけ普段は少し見えない胸の谷間を奥まで見せ付けるようにしている。

「両奈ちゃんを蔑んだ目で見下しながら罵倒していじめながら、ご主人様の性奴隷にしてください」

両奈はそう言って、俺の胸に飛び込んできて、甘えるように胸板に顔を擦りつける。

「―ああ、ご主人様の臭い素敵」

俺の体臭を嗅ぎながら恍惚とした表情を浮かべる両奈。

―もういいや、俺、両奈のご主人様になろう。

そんな彼女を見て、俺もほぼ投げやりに覚悟を決めた。

「ご主人様、まずは両奈ちゃんの口マンコで御奉仕させていただきます」

両奈はそう言いながら俺を立たせると、俺の前でひざまずきズボンを下ろす。すると、まだ半立ちのペニスが両奈の目の前に露になる。結構な至近距離のため両奈の息がペニスにかかって少しくすぐつたい。

「ああ、これがご主人様のおちんぽ。両奈ちゃんの御奉仕で元気になつてください」

両奈はそう言うのと、口を大きく開け、ペニスを啜える。

「……はむう、れろ……あつ、ぴちゅ」

ペニスの先端が口の中の滑らかな感触に包まれる。

両奈はペニスを口に含むと、舌を伸ばしペニスを弄り始める。

唾液のたつぷりのった舌の温かな感触に、ペニスはたちまち勃起する。

「んんっ……びちゅ、んっ、んふふ」

両奈はペニスが勃起したのを見ると、嬉しそうな笑みを浮かべ、今度は舌をペニスの先端全体を舐め回すように這わしてきた。同時に電気が走ったような快感が押し寄せる。

唾液の温かい感覚と、舌がペニスに触れるたびに押し寄せる。

「ちゅぱ、じゅぶ……んうっ、れろ；お……ちゅっ」

両奈は俺の反応を見て、さらに先端を舐めながらしゃぶるように口を動かす。

確かに今でも気持ち良いのだが……。どうせなら両奈が喜ぶようにしてやろう。

そう思った俺は、両奈の頭を両手で掴むと、一気に腰元まで引き寄せ、ペニスを喉奥まで突き入れる。

「んぶっ!!? んっ、じゅぶっ、んくっ!」

突然の俺の行動に両奈は驚いたような反応をしながらもペニスに舌を絡ませてくる。

「イマラチオされてみたかったんだろ? どうだ? 嬉しいか?」

「あむっ、れるじゅぷっ！ んぐぷっ、んつぶ！ ちゆるっ、じゆるるっ!!」

両奈は俺の言葉に答えるように必死にペニスをしゃぶり始める。イマラチオで喉奥まで無理やり突かれて普通ならば苦しいはずなのだが、両奈の目尻は下がり、目に見えて嬉しそうな表情をする。

「んむっ！ けほっ、んぶっ…んぐっ、んく…んぶぷっ！ えふおお!!」

ペニスが根元まで入る寸前で喉にぶつかり、両奈が息苦しそうにするが、そんなこと気にせずただ自分の欲を満たすため腰を動かし、更なる快感を求めペニスで喉奥を突く。

俺が夢中になって両奈の頭を動かしていると、両奈が自ら頭を動かしてペニスを根元まで啜えこみ始める。

両奈が頭を動かすたびに、口内の温かい感触と唾液のついた舌がペニス全体を舐めまわすと、とてつもない快感が身体中を駆け巡る。

「んむう、んんっ…ふあ！ んじゅ、んぶるるうっ…ちゆるるうー！」  
どんどん激しく腰を打ち付けていくと両奈の表情は恍惚なものに変わっていき、自らの股間を弄り始めた。

「んふうっ…んぶうっ！ あむう、んぶるっ…れるっ、んぐっ…んぎゅう！ れろ、ちゅぱっ！」

両奈は唇をすぼめ力り首を責めるような動きを始め、俺に今まで以上の快感と共に射精感が込み上げてくる。

両奈も昂ぶっているのか、彼女が自身の股間を弄るたびに聞こえる水音が激しくなる。

「両奈、もう、射精するから…、しっかり口で受け止めて、全部飲み込むんだぞ」

俺はそう言うと、両奈の頭を激しく前後させ腰を打ち付けると、両奈もそれにあわせるように頭を動かし、唇をすぼめ舌を絡ませバキュームしてくる。

俺は自分の限界のタイミングに彼女の頭を腰に引き寄せ、喉奥にペニス捻じ込み射精する。

「んっみゅううっ！ おぐぷっ、んぐっ、んぐむう、じゅぷっ、じゆる

る！」

俺が射精すると、両奈は尿道に残っている精液も取り出すような勢いで吸い取り始める。

「んふうっ…んふうっ！ ずずっ、ちゆるる、じゅうずろおっ…！」

両奈は精液をゆっくりと味わうように飲み干していく。

精液を飲み干していく彼女の表情は、乙女がするような表情ではない恍惚とした表情だった。

—どうやら俺が射精したのと同時に絶頂を迎えたみたいだな。

俺は快感に浸かっている両奈の前に、精液がついているペニスを彼女の眼前に出す。

「ほら、ちゃんと掃除しろ」

「は〜い。ちゅっ、ちゅば、あむっ…」

俺の言葉に両奈は従いペニスを愛しそうに舐め始め、綺麗に精液をなめ取ると妖艶な笑みを浮かべる。

「ご主人様のオチンポで、両奈ちゃんのオマンコをめちやくちやにしてください」

両奈は服を全部脱ぎ産まれたままの姿になると、こちらに尻を突き出しながら犬のように四つん這いになり、尻を高くあげると誘うように尻を左右に振り、割れ目を指で押し開き、恍惚とした表情を浮かべながら甘える声で言う。

当然、両奈の誘惑に抗うこなどできるわけもなく、彼女に誘われるがまま、勃起したペニスを膣穴の入り口に当て彼女の尻を掴むとペニスを割れ目に当てゆっくりと膣へと侵入させる。

「ああああっ！ はいって、んくうっ！」

少し抵抗のある膣内をペニスで押しひろげながら両奈の膣奥まで侵入させていく。

さきほどのイマラチオの際に充分に膣内が濡れていたのか、ペニスの根元までスムーズに入って行き、これ以上侵入することのできない膣奥へと突き当たる。

「あつ、あああ。これが、ご主人様のオチンポ…。両奈ちゃんのおまんこの中にピツタリきて、とても熱くて…入ってるだけでイっちゃう」  
ペニスを根元まで入ったのを確認し、両奈の様子を窺うと、背中を少しだけ反らしながら、喜びが混じったような声を上げる。

心配は要らなかつたかな……。

「両奈、動くぞ」

「はい。両奈の…あつ、オマンコつ、あつ、いっぱいズボズボ、あんつ、して…んんうっ！」

両奈が言い終える前にさつきよりも少し速いスピードで腰を動かして、ペニスの先端が見えるくらいまで引き抜き、奥まで一気に突き入れる。

「あつ、ああああつ！ 膣内が、あはつ、擦れてえ…あふああ、ああああ！」

一気に奥まで突き入ると、ペニスに絡みついてくるヒダのほど良い刺激と、消して離さまいと膣内がきゅつと締めつけてきて、とてつもない快感がペニスから全身に広がる。

両奈の様子を少しだけ気にしながらも、腰の動きを速めていく。

「みやあああつ、はああつ…！ あつ、ああ〜！」

俺が腰を動かして奥を突くたびに両奈は嬌声を上げ、膣内をきゅつと締めつけてくる。その度に快感が全身を駆け巡る。

だが…両奈の膣から尋常じゃないほど溢れる愛液が溢れるのが見える。

もしかしてと思い、腰の動きを激しくしながら両奈を見る。

「はあああつ、あ…あああつ！ しゅごつ、あひやあああつ!」

奥を突く度に両奈が仰け反り身体が小刻みに震えているのが分かる。

もしかしてイッてるのか？

……。

「ひやああんっ!? 深い！ あああ!! 気持ちっ…いいいっ!!」

膣奥のさらに奥へを貫くように激しく腰を打ちつけると、両奈は頭を上下に振りながらよがる。



「ぎゃあっ、あああ!？」

もう一度同じように腰を打ちつけると、両奈が後ろからでも表情が見えるほど大きく仰け反る。

その表情はとても艶美で、今まで見てきた中でもとても幸せそうだった。

そんな両奈の表情が見たくて、お尻を強く掴み乱暴に腰を打つける。

「ふああっ、ああう!? ああああ!?! イクツ…!」

ペニスを奥まで入れ膣奥の行き止まり―子宮口へと先端をグリグリ押しつけると、これまでにないくらい膣内がきゅっつと締めまり射精感が込み上げてくる。

いきなり込み上げてきた射精感を堪え誤魔化す様に、鷲掴みしていた両奈のお尻を思いつき叩く。

「んひっ!?!」

乾いた音を立ててお尻が鳴り、両奈の一際大きい嬌声が聞こえてきた。

「あっ、んっ、あはあ…んんうっ! ご、ああっ、ごしゅじんさ…んっあああっ!」

両奈がこちらへ顔を向けて、何を言おうとしてるのか分かった俺は、先ほどよりも強くお尻を叩く。

さきほどよりも大きい音が鳴り、波打つようにお尻に衝撃が広がっていき、膣内がさつきよりもきゅっつと締めつけてくる。

「あひいっ! あぐっ、んんむうっ!! あっ、もっとお! あはあっ!」

両奈の声に應えるように、腰を激しく打ちつけながら、お尻を本気の力で叩く。

乱暴に腰を打ちつけるほど、膣奥のさらに奥を突けば突くほど、お尻を強く叩けば叩くほど膣内の締りがよくなり、頭から背中まで、全身を電流のように快感が駆け巡る。

ここまで堪えてきた射精感も限界を迎える。

俺は腰をみっちり両奈のお尻にくっつけ、背中から覆い被さる

と、両奈の大きいおっぱいを掴みながら、膣奥にペニスの先端を押しつけながら射精する。

「あつ、ああああ!?! ひゃあああ〜!?!」

射精すると、両奈弓のように大きく仰け反り、軽く痙攣を起こす。

「あふう…いふいいい!?!、れが…セックス。最高お」

両奈は身体を小刻みに震わせながら言うと、腕に力が入らなくなったのか、そのまま腰を浮かせたまま倒れこむ。

倒れている両奈は口を開けたまま舌をだらしなく出し涎を垂れさせ満足気な表情をしている。

そんな両奈の表情を見た俺は

—まだ足りない。

両奈の右脚を腕で抱えるように持ち上げ、膣に入ったまま硬さを取り戻したペニスを膣奥へと突き入れるように腰を動かす。

「はあつ…あああああつ!?!」

両奈はいきなり自分の膣内で再び動きだしたペニスに驚いたのか、嬌声を上げながら俺を見つめくる。

潤んだ瞳で見てくる両奈を見て、自分の口角が自然につり上がるのが分かる。

「両奈、まだまだいくぞ」

そう言って再び腰を激しく打つける。先ほどとは違い、ただ乱暴に、まるで物を扱うように。

「あひっ!?! あぎいいいっ!?! ふあああつ!?!」

物のように扱われているというのに、両奈はただ嬉しそうに声を上げ、膣内を締めつけてくる。

「はっ…ふあああ!?! ああ〜っ!?!」

再び入り口から膣奥まで、一気にペニスを入れグリグリと押しつける。

「イ、イ…イッくうううー!!」

すると両奈の身体が大きく跳ね痙攣し、絶頂を迎えているのが分か

る。

そんな両奈の姿を見て、込み上げてきた射精感を、今度は堪えることなく、膣奥へと解き放つ。

「あふう…いいいい！ いっ…いいいいのお…」

両奈は瞳をトロンとさせ、満足げな表情で俺をみつめた。

「ふん♪ふん♪」

行為を終え一緒にシャワーを浴び身体を綺麗にしては、再び汚してまた洗うを何度か繰り返し、後はもう寝るだけというのに、両奈は鼻歌を歌いながら、クローゼットを漁っている。

「両奈、何しているんだ？」

俺はベットに横になりながら、下着に包まれた形の良いお尻をこちらに向け振っている両奈に声をかける。

ちなみに、両奈は、俺のYシャツにパンツだけ履いているという格好だ。

…襲うぞ、この野郎。と思いながらしばらく眺めていると。

「じゃ〜ん♪ 今度はこれを使ってしようよ♪」

両奈は満面の笑みを浮かべ、鞭、縄、猿轡などのSM道具を並べる。

俺は並べられた道具と、両奈を交互に見つめる。

「わくわく♪」

「……」

両奈の期待した表情に折れ、黙って頷く。

……夜はまだまだ長くなりそうだ。

そう考えながら、縄の縛り方とか勉強しておこう。そう心に強く誓った。